
ブルーストーリーズ

有栖川市子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーストリーズ

【Nコード】

N8505H

【作者名】

有栖川市子

【あらすじ】

人間を恐れながらも自らが人間であることを受け止め生きていく
うとする少年と少女の物語。

碧の物語 プロローグ

碧の物語

きみが笑うならそれだけでよかった。

きみの喜ぶところがみたかった。

みんながぼくをどう思っていても

きみが笑うならそれだけでよかった。

僕の最後の道化を……

きみをそんなに泣かせるためにしたんじゃない。

だって、みんなはあんなに笑っていたじゃない？

なのに

どうして

きみは泣いているの？

“ 僕はよく夢を見る。

すごく青い世界に一人だけの夢。

僕は話せなくて、動けなくて、ただ立っている夢”

それはぼくの姿じゃないんだ。

第一話：転校生

またあの夢だ。ただの青いだけの夢。

「アオつアオつ、起きなさい。学校に間に合いませんよ!!」
今はもう二十一世紀だけれども、世の中はたいして進化していない。いまだに世界は何万年も前と同じく戦いを繰り返していた。

ただそんなことは僕の人生には格別関係のあるものではなかった。たいしてかわらないもの。関係あるのは、明治からもっているこの古く大きな家と母さんが毎日着る着物だけだ。

代々受け継がれてきたこの家はガスと電気と水道を通したただけであとはそのままだった。ただっ広い畳の部屋で家族五人が正座でご飯やお味噌汁を食べる。これまた明治から動きっぱなしの柱時計が刻々と時の音を告げる。ただそれだけ。それがなんだか息苦しかった。階段を下りるとみんなはもう朝食をとっていた。

おとし一緒に住んでいたおばあちゃんが死んでから、僕の家族は五人。

父さんはひいひいお爺さんが起てた会社だかなんだかの社長だ。といつても、小さな会社だ。だから別に僕が継がなきゃいけないとか、そんなのではない。

母さんは専業主婦で、僕の家はわりと亭主閑白型。

二人の姉さんがいて、一番上の弥生姉はもう二十歳だ。女子大生で、わりとあそんでいない。まじめ。二番目のさき姉は十七歳。本人は青春真只中の今が旬の seventeen だとうるさい。

ぼくはいま十三歳。今年中学に入ったばかりだ。なんともない。ただの中学生。

毎日毎日おなじことの繰り返し。それもなんだかどうでもいい。

「アオ、ちゃんと宿題やった?？」

「うるさいなあ・・・やったよ!母さん、もう中学生なんだから、やるに決まってるでしょ・・・」

「でも、アオって小学生の頃一回も宿題やらなかったじゃない」
弥生姉が余計なことを言った。

ガチャガチャと茶碗と箸を台所へはこび、荷物を持った。

「ごちそうさま。」

「いってきます」

急ぐように家を出た。

『アオ』っていうのは、父さんがつけた名前で、『碧』と書く。

父さんは、この『碧』という字が好きらしく、男の子が生まれたらずっとつけようと思っていた名前らしかった。

小学校一年の頃、学校で『青』という字を習って帰った日、母さんと父さんに自分の名前だといひ『桜井 青』と自信満々で書いて見せた。

すると、父さんは僕に平手打ちをした。

怒った。

おまえは『碧』なのだと教え込まれた。

なぜ父さんがそこまであの『碧』という字にこだわるのか、不思議でたまらなかった。けれど、父さん自身に聞いたことはなかった。聞いてはいけない気がしたのだ。

「アーーーオっ はよっ!!」

後ろからどつかれた。

秀作だ。

「お前知ってつか?今日転校生がくるんだって。かわいい子だといひよなあ・・・」

「何で女って決め付けてんだよ。男かもしないだろ。」
そう言うと、秀作はニヤツと笑って言った。

「女なんだよ。実は俺、昨日もう会っちゃったんだよね。顔は見てないけど・・・職員室から出て廊下歩いているとこ見たんだよ。長い髪をみつあみにしててさ、白いワンピースで。絶対かわいいって!」
なんで絶対って言い切れるんだよ!と言おうと思つてやめた。

秀作はそういう奴だからだ。いつもバカみたいに信じきって決め付けている。

ま、それがいつもそのとおりになるわけじゃないんだけどね・・・。

朝のホームルーム。

秀作の言ったとおり、転校生がきた。

黒板に白いチョークでパキパキした字で『南山 ひろみ』と書かれた。

そいつはきちんと立っていた。学生服に身をつつんで・・・
僕らと同じ学ランを着て・・・

秀作に向かって小声で呼びかけた。

「秀作っ!秀作っ!どこかわいいた女の子なんだよ!どこに長い髪があるんだよ!?!」

「あつれ〜おかしいよ!!ホントに俺はみつあみの白いワンピースの子見たんだって」

「南山ひろみです。よろしく。」

南山ひろみはそっけなく自己紹介をしてあつという間に席についた。しかも僕のとおり・・・

そのあと、休み時間に僕は南山ひろみに話しかけてみた。

「南山くん・・・僕、桜井 碧っていうんだ。よろしくな。」

「アオ??」

『南山 ひろみ』があきらかに「変なの」って感じの顔をした。

「そう、めずらしいだろ。しかも、普通のこう書く『青』じゃなくて・・・」

空に指で『青』と書いて説明した。

「こつちなんだよ。この『碧』。碧海とか碧玉とかの。オヤジがえらくこの字が好きでさ。」

また空に『碧』と書いてみせた。

そして最後に

「変だろ」

と、笑ってつけくわえた。

「へえ・・・。俺もさあ、結構変な名前じゃん? 『ひろみ』って女みたいじゃんか? でも、お前みたいな【変】もあるんだな。お互い大変だな。」

といて笑った。

意外と普通な奴だ。

これが最初の印象。

半年も経つと、僕は結構な仲になっていた。ひろみはやたらにものはつきり言うが、(初対面で人の名前を変と言ったやつだしな・・・)おもしろいやつだった。ひろみはひろみで秀作の『絶対』がツボらしかった。

学校はそんな感じ。別に普通。

何も起こらない平和な毎日。宿題をせずに先生に怒られたり、秀作とひろみと放課後ゲーセンに行ったり、テストで散々な点数をとっても紙ヒコーキにしてへらへらしてた。楽しいし、まあいいかって感じ。

だけどその平和な毎日に亀裂が入る日がとうとうきてしまった。

中学入学から八ヶ月目、十一月の十七日。

深夜十二時、眠る前に水を飲み、階段を下りて居間を通り過ぎ、台

所へ行こうとしたとき僕の名前が聞こえた。父さんも母さんもテレビもつけずに2人でたんたと話している。

「今年もまたあの人の命日がきますね・・・あなた、また行くんでしょ？今年わたしも連れて行ってください。もう、変な感情はありませんから。あなたのことを信じていますから。アオのコトだつてもう気にしていません。だから・・・」

「またその話か。何度も言っただろう。彼女は私の学生時代の恋人だ。特に思い入れはない。おまえと婚約するだいぶ前に別れていた。だからもう関係ないんだ。去年命日に墓参りをしたのはたまたま彼女の親に仕事で関わっていたからだ。もうそれも今年の三月で終わった。だから今年に行かないと何度も言っただろう。アオは本当に施設からもらった子だ。なかなか男の子ができなくておまえが苦しんでいただろう。だから一人で行って手続きをしてきたんだ。おまえだつて認めて自分の子のように育てたじゃないか。」

「あなた・・・本当に信じていいんですね・・・」

「アオには、成人をむかえる時に話そう。それまでは黙っていよう。」

「ええ・・・」

のどがカラカラだ。

でも、手には汗がびっしょりだった。

急いで部屋に戻った。

ものすごく鼓動が速くなっていた。

異様にふるえがして、考えが追いつかない。

ふとんをばさつと敷き、すぐにくるまった。落ち着きたかった。

寝てしまえば、それは夢だと思えると考えた。

でも眠れなかった。

僕が養子だつて????施設からもらってきた?????

ありえない。

こんなこと・・・ドラマのなかの話だ。

僕が原因で口論を？

ははは・・・

笑えない。全然笑えない。

だって2人ともいたって冷静で真面目にしゃべっていた。聞き間違えるわけがない。僕のなかには恐怖が居座っていた。聞き間違

第二話：父と母の過去

翌朝、僕は5時に家を出た。誰にも・・・家の中の誰にも会いたくなかった。早く学校に行つて秀作やひろみとバカな話をして笑いたい。そしてうまくこのことを忘れたい。助けて・・・

こんな早くから学校はあいてないだろう。どこかに行つて時間をつぶさなきゃ。

そう思つて、近所の小さな公園に足を進めた。早朝の公園は人の姿もなく、見えない小鳥のさえずりが聞こえるだけだった。ベンチに座つてぼんやりと昨日の口論を思い出した。

“今年もまたあの人の命日がきますね・・・あなた、また行くんですよ？”

“もう、変な感情はありませんから。”

“あなたのことを信じていますから。”

“彼女は私の学生時代の恋人だ。”

“特に思い入れはない。”

“おまえと婚約するだいぶ前に別れていた。”

“あなた・・・信じていいんですよね？”

“誰のことなんだ??”

自分が養子かもしれないという会話にだけ気を取られていたが、思えばこの会話のついでに僕のことが出てきたみたいだった。

『あの人』って誰なんだ？

命曰つてことは『あの人』は死んでしまっているってことだ。

しかも、『あの人』は父さんの学生時代の恋人。

母さんは『あの人』に変な感情を持っていた？

父さんをしきりに信じたがっていた。

つまり、疑ってるってことだ。

変な感情つてのは……『あの人』と父さんとの関係を怪しんでいたってことか???

なんでそこに僕が出てくるんだ???

……

考えは一つ浮かんだが、あまりそうは思いたくない。

確かめなくちゃ。

そうじゃないといい。

僕の考えなんか、ありきたりなドラマのシナリオのようだと笑えるように、真実があるといい。どうか、そうであって……

神様なんか信じてないけど、いま信じるから、どうか、そうではないようにしてください……

そして、その日学校が終わるとすぐに家に飛んで帰った。

あれほど誰にも会いたくなくて早くに出てきた家に飛んで帰るなんて、自分でもおかしい気がした。しかも……これから僕がしようとしていることは僕自身を苦しめるかもしれない……

でも、みつげなくちゃいけない気がする。

真実を……

アルバムや写真があるのは、屋根裏だ。そこに行けば父さんや母さんの学生の頃の物も何かあるかもしれない。

不審な動きと思われぬように、そっと屋根裏へあがった。

埃っぽい空気がただよっていた。

ダンボールがいくつもおいてあり、本棚には本なのかアルバムなのかとにかくいろいろんなものが置いてある。

写真。

まず写真を探そう。父さんたちの話していた『あの人』がわかるかもしれない。

まず、父さんのアルバムを見た。まあ、あたりまえかもしれないけど、ほとんど写真が貼られていない。やっぱり、アルバムにはないよな、さすがに。

ダンボールをいくつか見てみよう。そう思ってひとつひらいた。

埃がふわつと舞ってけむい……。

写真がきちんとした木の箱にしまわれている。

ひらいてみると、それは若い頃の母さんの写真だった。大学生の頃のように見える。何枚かは今の母さんの面影のあるものだったけど、ほとんどは今とは全然違かった。とても活発的な女性で、キャリアウーマンにでもなるような、スーツ姿やショートカットの髪。よく似合っているのに、なぜ今は長い髪をおだんごにまとめて、着物を着込んでおとなしい明治時代のような女性になっているのだろう。父さんとの写真が見当たらない。

たしか二人は大学で知り合ったはずなのに……
写真を何枚か見ていくとやっと父さんの顔に会った。

だけどそれは父さん一人の写真だった。何枚かあったがそれもみんな父さん一人の写真だ。しかもこちらを見ているものは少なかった。ほとんどが何かどこか他を見ているような、そんな写真ばかりだ。一番最後の二枚の写真に父さんと母さんのツーショットがやっとあった。

それは母さんがもうおとなしめの女性になっているもののようにだった。

木の箱をどけると、下には何冊かの本とノートが出てきた。

あと、ハードカバーの日記帳が2冊。

日記・・・
開いてみた。

九月九日

今日もあの人と話せなかった。
もっと勇気が欲しい。あの子のように。
気軽に話し掛けられたらいいのに・・・。
それともあの子は彼女なのかしら???

九月十四日

今日あの人と初めて話せた。
すごくうれしい。
アイスをくれた。友達の友達のあたしに。
優しいんだなあ・・・。もっと話したかったのに、恥ずかしくてう
まく話せなくて・・・後悔。今度こそ話し掛けるぞ!!!

九月三十日

ショックなことがあった。
あの人に会って軽くおじぎをしたのに、無視されてしまった。
あの人にとってアイスをあげただけのただの友達の友達であるあた
しは知り合いなんかじゃないのかしら・・・
悲しい・・・

十月十一日

あの人が遠い。
どこまでもどこまでも遠くにいる人みたい・・・。好きなのに。
話してみたい。なんでこんなに好きなんだろう。明日はお休み。
この気持ちもお休みしたい・・・

十月二十七日

あの人に彼女がいることが分かった。

やっぱりあの子がそうだった。

なんか………気持ちがうまく整理できない。

母さんは誰かに片思いをしていたようだ。

父さんだろっか？

そして『あの子』が僕の探している『あの人』だろっか???

十一月九日

つらい。つらいつらいつらい………

あの人はとつてもとつてもあの子のことが好きみたい。

あたしがずっとしたいと思っていたこと全部全部しているあの子が

・

憎い

十一月三十日

あの人の好みに合わせようと思う。

髪はロングに顔はうすいナチュラルメイク。

おとなしそうな、女の子。

全くあの子みたい。

十二月五日

今日あの人の写真をもらった。友達がこっそりとってくれたみたい。嬉しい。どこかを優しそうに見ている。やっぱり好き。

あの子のこと忘れてあたしを好きになって……
なんて、バカみたい。

十二月二十日

もうすぐクリスマス……
あの人はきつとあの子と楽しく過ごすんだろっなあ……。
あたし、もうあの子のこと諦めようかな。
他の誰か、適当な人とつきあって、あたしも楽しくクリスマスを過ごしたいな。

十二月二十四日

やっぱり、ダメだ。
あたし、あの子が好きなんだ。
どうしようもないくらい。
好き好き好き。

この気持ちはどうしたらいいの???
今日はイヴなのに、寂しくて苦しいよ……

母さんは本当に恋する女の子だった。

父さんのことが本当に好きなんだ。
ぼくが読んでいても心が苦しくなるほどだ……。
それなのに、報われない思いだったんだ。

『あの子』がいるから。

『あの子』はやっぱり、『あの人』だろうか……

父さんの記憶が欲しい。

ダンボールを手当たりしだいにあけた。

一個目はなんだか古い洋服。

二個目は父さんの幼少時代のもの。

三個目にやつと目当てのものが見つかった。

アルバムとは正反対に写真がたくさんたくさんあった。

そのほとんどがふんわりとした女性とのものだった。きつとたぶん、この人が『あの子』で『あの人』だろう。なんだか、今の母さんの感じに似ている。

父さんは日記なんかつけそうもないな・・・

なんかないかな・・・

ごそごそいじっていると、手紙が大量に出てきた。

なんだこれ・・・

秀彰さんへ

秀彰さんの気持ちは、とてもとてもうれしいです。

でも、わたしは、秀彰さんには似合わないものです。

あなたは長年続く旧家の跡取りで、わたしは、父の大酒飲みが原因で別れた母と団地住まいの貧しいただの女子大生です。

どうかわたしなんかではなく、もっとあなたにふさわしい素敵な女性とお付き合いしてください。あなたの幸せを心から祈っているのです。

お手紙で申し訳ありません。

碧

碧？

・・・・・・・・・・・・・・・・碧？

僕？

意味がわかんない。なにコレ？『あの人』って『あの子』って、僕？僕と同じ名前なの？

女・・・・・・・・母さんの憎んだ、父さんの愛した女の名前が僕につけられた・・・・・・・・？？

あの考えが浮かんだ。最悪のそうは思いたくない考えが、よみがえる。

やめて！！！！

まだ分らないじゃないか！父さんはたまたま碧という女性を愛して、その文字を知って、その文字が気に入って、僕につけたかもしれない。

もしかしたら、その女性を愛したのはもともと気に入っていた文字を名前としてもっていたからかもしれない。

いくらだって他の考えが出るだろう???

なんなんだよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

本当に何なんだろう。

怖い・・・・・・・・。

怖い怖い怖い怖い！！！！

もうこんなこと、知りたくない。

父さんも母さんも僕が成人になったら教えてくれるみたいだし、それまで僕は気づかないでいたい。ただの普通の中学生だ。そうしていたい。今日はもうやめよう。

というか、もう、調べるのをやめてしまいたい。

ただ、そんなことは出来ないことは僕が一番よく分かっていた。後戻りも、知らないフリもできない。これは現実だから……。

父さんと母さんの過去はいつたい今の僕に何をあたえるのだろうか……。

手紙を何通かと、母さんの日記の二冊目を持ってダンボールを元に戻し、屋根裏を出た。

居間に行くと、夕食の準備がされていた。

「あつアオ！お姉ちゃんたち呼んできてくれない？もうすぐご飯だから。」

「うん……。」

いつもどおりの母さん。そりゃそうか、もし本当に僕が養子だとしても、今まで十三年間普通に普通に接してきたんだから変わるわけない。

僕だけが昨日知ってしまっただけで、後は普通の普通の……毎日すぎないのだから……ははは。

「姉さん、ご飯だつて。降りて来いって。」

「はあい。」

広い広い畳の部屋。今日も父さんは遅くって母さんと姉さんと姉さんと僕の四人の夕食。

いつもと、いつもと同じ風景……。

第三話：ひろみ

あれから、父さんの手紙を何通か読んだり、母さんの日記を読んだりして、いくつかのことが分かった。父さんは『あの人』を愛していたこと。『あの人』に手紙で告白して一度振られたこと。それでもあきらめずに手紙を出しつづけてつき合うことになったこと。母さんはそれを知って悲しみのどん底に落ちて、自分を見失って、外見も内面も『あの人』のように変えていき、今のような女性になったこと。

でも、なぜ父さんと母さんが結婚することになったのかは、わからないままだった。もっと調べなきゃならないんだけど、なかなか屋根裏にいけなかった。テストがあっただし、そんなに頻繁に行っても怪しまれるんじゃないかと思って怖かったからだ。

「アオっ!!！」

下校のとき下駄箱でひろみが話し掛けてきた。

「テストさあ〜どうだった??俺マジやべー!高校行けんのかって感じ。」

「僕結構良かったよ。」とにやつと笑ってみせた。

テスト・・・正直言って今回のテストはめっちゃめっちゃ勉強した。結果がいいのも当たり前くらい。あれを知ってから、なんとなく僕はイイコでいなければならぬという気持ちになっていた。僕が養子だという事実。母さんの憎んだ女の名を持つこと。すべてが僕の首を締め付けていた。勉強に集中するとそれが少しだがゆるまる感じがした。だから・・・いやでも結果はいいものとなった。

「マジで!?!ありえねえ!。なんだよ!!なんか目覚めちゃったわけ?????」

「別にそんなんじゃない……」

ひろみにだつて秀作にだつてあのことは言えるわけがなかった。友達だ。こいつらは本当に友達だ。でも、自分が養子だなんて父さんと母さんの過去なんて言えるわけがない。言うつもりもさらさらないんだ。僕が友達に求めるものは、平常心の保てること。楽しいこと。そういうことなのに、僕が養子だなんてことを、父さんと母さんの過去を、カミングアウトすれば、僕が『友達』に求めることはすべて得られなくなるだろう。

「やらしー。自分だけ必死に勉強しちゃってさあ。」

ひろみのこういうトコ、ムカツクな……。

「ま、今度勉強やるときは誘ってよ!! いつしよにやってよ!!」と頼むというポーズ付きで言ってきた。

ひろみのこういうところが好きで友達やってんだよな。なんか自分の気持ち押し込めないで何でも言うけど、相手をあんまりムツとさせすぎないっていうか、結果的にひろみはいい奴なんだなってわかるし。

「おー。秀作も呼んで三人でやろうぜ。泊りがけとかでー。」

「マジかよー泊りがけは勘弁だな。寝ないってことじゃん。俺寝ないと死ぬね。」

「一晩くらい寝なくても平気だよ。」

「そおかー……あつ!! 俺今日ピアノだった!! やっべ……遅れちゃうよ。先帰るな。じゃーなー」

……。ホントはつきり言っすっぱり帰りやがった。ま、いいけど。

ひろみは僕と秀作とはうちとけていたが、他の奴らとはあんまりうちとけてないようだった。ひろみも自分の意見は、はっきり言うが、家の事となるとほとんど黙ったりする。なんかあるのか？

今は人の家の心配をしている場合じゃないや。自分のことでせいっぱいだ。

今日は久しぶりに屋根裏にいつて父さんの手紙をもつと読んでみよ

う。

「ただいまぁー」

「おかえり。アオ。今日はね、おやつとってもおいしいの買ってきたのよ。」

「買ってきたの??めずらしいね。」

母さんはおやつをほとんど手作りしていた。

「ちよつと出かける用事があったものだから、ついでにおいしいって聞いてたケーキを買ってきたの。」

「どこ行ってきたの??」

「…………お友達のお墓参りよ。」

……………お墓参り……………

心臓が速くなりだした。

もしかして、『あの人』の??????

聞きたいけど、聞けるわけない。聞けない。平常心を、平常心を保たなくちゃ。

「どうしたの?アオ?」

「なんでもないよ。あまりにおなかすいちゃって。ケーキはやく食べたいな。」

「じゃあ、着替えておりてらっしゃい。」

「うん。」

どうしよう。どうしよう。

こんなことで動揺して、これから先どうするんだ?

ケーキなんか食べる気にもならないよ。

“母さん、母さんは僕のことを憎んでる?”

怖くてきけないよ。すべて話してしまいたいけど、ダメだ。

誰か……………。

トゥルルルルル

電話？

二階で着替えていると一階で電話が鳴った。

「アーオー、ひろみくんよー。電話ー」

ひろみ？

着替えをすまして、トコトコ階段をおり受話器をとった。

「もしもし？」

「あっ…………アオ？俺。ひろみ。あのさあ…………これから会って話せない？？犬の散歩するからさ、そのついでに公園でも。」

「いいけど…………」

「じゃ、いつもの公園な。」

ひろみ、なんだか泣きそうな声だったな。

なんかあったのか？？会って話したいなんて…………。今までなかったのに。

ま、こつちとしてもよかった。

気まずい思いで食べたくもないケーキを食べずにすむし。

「母さん。なんかひろみ、急な用事らしくて、今から公園いってくんね。」

「わかった。ケーキ取っとくわね。」

「姉さん達が食べたがってたらあげてもいいよ。」

「わかったわ。いってらっしゃい。」

“いつもの公園”とは、僕の家から歩いて十分くらいのところで、ひろみの家からも十分くらいのところにある、本当に小さい公園だ。

公園につくと、すでにひろみとひろみの犬のハルの姿があった。

「ひろみ!」

「あっアオ! 悪いな、いきなり。」

「ひろみがそんなこというのめずらしくない? どしたの????」

「あ……のさあ、俺しばらく遊べなくなるわ。」

「なんで? 習い事忙しくなんの??」

「いや、習い事は全部やめた。」

「じゃ、遊べるじゃん!」

「代わりに、塾行くんだ。毎日。」

「塾??? 毎日??? ひろみ、そんなにテスト悪かったのかよ。」

「めっちゃわる……………」

そういうと、ひろみは泣いていた。

なにがなんだかわからなかった。

小さくまるまって声を押し殺して涙を流すひろみがいた。

いつもへらへら笑って、なんでも言っているひろみとは全く別の人物のようだ。

よく見ると、ひろみの頬は真っ赤だった。泣いているからではないだろう。おそらく誰かにぶたれたのだ。父さんにぶたれたことのある僕はわかった。

「どうしたんだよ?」

「……………」

「言えよ。そのために僕呼んだんだろ? 僕、口かたいし。な?」

「……………おっ俺……………母さんにぶたれてる……………」

「もうずっとなんだ……………ひっく、習い事も母さんに無理やりいくつもいくつもやらされて、そんなんじゃ、勉強なんかできるわけないのに……………もうずっと、俺、成績悪いし、テスト悪いし、それで……………それ……………虐待なんじゃないのか?」

「ちつちがう！母さんは、できない僕をできるようにするためにやってくれてるんだ。……。」

「……。そうか……。……。」

何もいえなかった。いつものひろみとあまりに違うこんな痛々しいひろみに何を言っただけ慰められるのか、言葉が出なかった。ひろみは悲しいほど両親が好きなのだ。

僕が養子だったら、父さんと母さんを恨むかな???

そんなことをふと思った。たぶん、恨まない。それより、僕自身を恨むだろう。

僕が、『青』という文字を書いてぶたれたあの日、僕は頬の痛みを涙を流しながら、自分はなんてバカな奴なんだということにも涙を流していたのだ。

親は僕たちにとって、絶対的な存在だ。きっと、親は子供にとってのすべてなんだ。価値基準を覚えるのも親の下でだし。親のことはすべて肯定的にみてしまいがちになる。だから、ひろみはこんなにも両親の言うことを懸命にきいて、ここで涙を流しても、きちんと塾に行くだろう。成績も上げるだろう。

どうか、この気持ちを少しでもひろみのお母さんがわかってくれませうように……。……。

「ひろみ……。……。僕にも誰にもいえないことがある。家族のことだけど、それ以上はいえない。今それがとてもつらくて、眠れない日も何日もあるし、泣くこともある。そういう時、誰かにいて欲しいと思う。だから、お前も僕を頼っていいよ。何を言ってもいいよ。僕も、いつか何もかもを、ひろみに話してしまうかもしれない。それでもいいならいつでも頼って……。……。」

「ありがとう。」

そう言って僕らは別れてそれぞれの家に帰った。

ひろみも大変だな。あいつはだから、あんなにへらへらしてたんだ。家に着く頃には僕の心はとても穏やかになっていた。苦しいことが半減した気持ちだった。

ケーキはきちんと残っていた。“とても”とはいえないけど、おいしかった。ひろみの悲しい告白が、僕には“ひとりじゃない”と言ってくれたように感じた。ひろみもそう感じてくれてればいいなと思っただ。

第四話：母親

「アオっ！アオー！起きなさい。今日から二年生なんだからいいかげん朝くらい自分で起きなさい。ほら、おきてー！新学期から遅刻するの??？」

毎日変わらない母さんの声で始まる一日。

着物を着つつける母さん。おとなしめの女性らしい人。

これは本当の母さん??？『あの人』になるためにいつわってるんじゃないのか??それとも、もう本当にこういう女性になったのかな……。

ご飯をさっさとすませて、いつもより早めに家を出た。

今日は始業式の前に新しいクラス発表があり、それをみて、自分のクラスに移動しなければならぬから、時間がかかるのだ。

「おはよ。」

後ろからひろみが声をかけてきた。

ひろみの告白があつてから、僕とひろみは前より仲良くなった気がした。あのことはまだ話してないし、ひろみもあれから母親の話をしていないが、なんとなく、なんとなくだけど、仲良くいられた。

あの日は帰ってから、なにも調べる気にはなれなくて、……。あの日からまだ一度も屋根裏に行つてなかつた。

そうして、僕は中学2年になった。

「クラスがえどうなつてつかない……。」とひろみが言った。

「結構クラスがえって重要だよな。3年は持ち上がりだし、修学旅行も、このクラスだしさ。やな奴いないといいな。」

「おつす。」

ひろみと話していると、後ろから秀作もきた。

いつもの三人で下駄箱のトコに貼り出されたクラス発表を見に行った。

僕は三組だった。

「俺とアオいつしよじゃん。」

「俺だけ離れた！！俺、五組だし。あつても、五組、一哉いるじゃん。あつ！一哉だ。俺あいつとクラス行くね。じゃーなー」

秀作とはなれるのなんて、久しぶりだな。結構ずつと一緒だったしな。でも、ひろみと一緒だし、知ってる奴も何人かいるしな、まあまあなクラスだ。

「三組つて西校舎だったよな??」

「そうだよ。二年の一、二、三組と四、五、六組は離れてるんだよ。」

「じゃ、もう行こう。遠いじゃん。西校舎。」

「うん。」

二年三組の教室に入るともう大部分の生徒が来ていた。

見渡すと、知った顔がいくつもあった。

あいつ………。

クラスの真ん中辺りで机に座ってまわりに何人かの友達を従えている奴がいた。あいつはたしか、木庭修司だ。前のクラスでもボスの存在で、いばり散らしていたらしいやつだ。逆らわないほうがよさそうだ。

このことをひろみに話そうとした時、

「そこ、俺の席なんだけど、」

と木庭にいつているひろみがあった。

「あ、まじで？わりーわりー全っ然わかんなかったわ。席なんてどうでもいいじゃんかよ。」

「そこに、座席表あるだろ。見とけよ。バカだな。」

ひろみのほか！お前のが、ばかだよ……。

木庭にバカなんて言っちゃって……。

「ああ！？んだ、このやるお！」

「冗談だよ。いいよ。座ってるよ。席なんかどうでもいいよ。」

ナイスフォローひろみ！でも、なんだか木庭の怒りは収まってないようだった。

ガラッ

そのとき担任が来て始業式が始まると告げて、事は終了した。

木庭は、ひろみをじっと見ていた。

その後どうでもいい校長やら生活指導やらの長ったらしい話のある始業式が終わり、家に帰った。

帰りはひろみといっしょだった。あれからひろみは毎日休まずに塾に行っていた。成績は順調によくなっていた。

「今日も塾？」とひろみに聞いた。

「うん。今日は学校がいつもより早く終わるだろ？だから、いつもより早めに塾が始まるんだ。」

「じゃあ、今日も遊べないな。」

「ごめんな。」

「別にあやまんなよ。僕もちよつとやろうと思ってることがあるし。」

「なにやんの？」

「手紙読むの」と、にやつとしてみせた。

「書くんじゃないくて??？」

「そう、何通もだ。」

「なんだよ。お前……」って言ってひろみは笑った。

「それとき、ひろみ、あの、木庭にはあんまり物事はつきり言うなよ。おとなしくしとけ。」

「なんで？」

「あいつとこじれたらめんどういことになりそうだし・・・前のクラスでもそうだったらいいし。」

「なにそれ。」

「だから、なんでもいいからおとなしくしとけ!!!」
そういつても、ひろみはまだけらけらと笑っていた。

ひろみと別れて家に着いた。

さあ、今日はあれ以来入っていない屋根裏に行くぞ・・・そして、探すんだ。本当のことを・・・。

約半年ぶりに入る屋根裏は、半年前とちっとも変わっていないかった。ほこりっぽくて薄暗い。父さんのダンボールをあけた。半年前のように何通かの手紙を取り出し、屋根裏を出ようとした。何通か手紙を取り出したとき、他の手紙より明らかに新しそうな手紙をみつけた。全部で六通ほどだった。

僕はドキツとした。なんだかわからないけど、怖くなった。だけども見なくてはならないと思った。新しいほうの手紙をすべてつかみ、屋根裏を出た。

いつになく胸がざわついていた。息もあらくなっている。

それでも、それでも、見なくてはいけない。

手紙の消印は、十六年前だった。

.....。

あの最も恐ろしい考えがよぎる。いやだ!!見たくない!母さん!心とはうらはらに僕は急いで手紙をあけた。

秀彰さんへ

ご無沙汰しています。元気ですか?私は、ようやく仕事にも慣れて

きました。

奥様と子供さんたちも元気ですか？

いきなりですが、もう、お会いするのをやめようと思います。

秀彰さんは、ご家族を大切にしなければなりません。

私なんかと会ってはいけないうです。

わかってください。

愛してます。

大好きです。

あなたは運命の人です。

だから、私は誰とも結婚しません。

あなたのことを思いつづけます。

でも、もう会いません。

さようなら。

碧

“ お会いするのをやめようと思います。”

.....

息がしづらい。

父さんは母さんと結婚した後も、姉さん達がもしくは僕が生まれた後も、『あの人』と会っていたんだ。どうして？なんで？別れたって父さん言ってた。母さんに言ってたもん。

母さんと婚約するだいぶ前に別れたって、言った。

言っただんだ！

あれは嘘？

父さんは母さんに嘘を言うの？

あんな普通に、とつても本当らしく.....

それでも疑う母さんだけど、少なくとも僕には嘘には聞こえなかったのに。

父さん.....

もう一通手紙を手にした。
消印は一五年前だ。

秀彰さんへ

ごめんなさい。

もう、お会いすることも、連絡も、やめますと、言ったのに……
どうしても、会って話さなければならぬことが起こってしまいました。
都合のいい日に連絡を下さい。

碧

『どうしても、会って、話さなければ、ならないこと』って……
……。何？
最悪だ。

僕はもうどうにかなくなってしまいそうなほど、頭の中がぐるぐるして
いる。寒気がして、なんだか無償に泣きたくて、小さい頃のように、
大きな声で泣きたい。神様、僕を、壊さないで。

秀彰さんへ

この前はお忙しい中、わざわざありがとうございますとうございました。
私の赤ちゃんをうつとうつしく思っていますか？
もし、思っていたら、正直におっしゃってください。
私、あなたの前から消える覚悟もあります。

どんなことでもできます。

ただ、この子は確かにあなたの子供です。そのことだけでも、どうしても知っていて欲しかったんです。この子の為にも。

奥さまには本当に申し訳ないと思っています。

離婚もお金も求めてはいません。

ただ、この子供にほんの少しでも愛を傾けてください。

お返事お待ちしています。

碧

ああ………。

僕の運命はどうしてこうもろいものなのだろう。神様なんか、いないのか？

消印は十四年前に変わった。

秀彰さんへ

あのお話は本当ですか？

私の体が弱いばかりに、ごめんなさい。

でも、奥さまは大丈夫なのですか？

赤ちゃんのこと、私のことを知っているのですか？

赤ちゃんを守ってください。

私、先が長くなさそうです。

赤ちゃんの名前も知らないままいなくなってしまうそう……。

最近は起きてることさえつらくて、寝てばかりいます。

寝ていてそのまま死んでしまいそうで怖い。

怖いです。

秀彰さん。言うてはいけないのはわかっています。でも、でも、会いたいです。会いたいです。

碧

秀彰さんへ

手続きは、三日にお願いします。その日一日退院を何とか担当医から許されました。私の赤ちゃんと言うことは内緒なんですね。素敵な秘密になることを祈っています。

あなたの家庭を壊す秘密にならないように。

そんなこと、ゼロに等しいかもしれませんが。

私のことをちっとも知らずに育つと思うと、少し・・・寂しいです。

けど、これがこの子のために一番良い方法です。

秀彰さんよろしくお願いします。

碧

秀彰さんへ

本当に本当に今日はありがとうございました。

秀彰さんに会えて嬉しかったです。私の人生で秀彰さんに出会えたことは本当に運命だと思います。大好きです。さよなら。

永遠に愛します。

さよなら。

碧

僕は一息もつかずに新しい封筒のすべてを読んだ。もう、僕の頭の中はパンクしそうだった。でも、なんだか気持ちがいやに冷めていた。

この赤ん坊は僕だ。

どこにも僕だということは書いてないけど、絶対に僕だ。僕の母親は『あの人』だ。母さんの憎んだ、父さんの愛した、

『あの人』

がちゃ

何分間か一人でぼうっとしてしまっていたとき、玄関のドアが開いた。

「ただいま」

いま一番会いたくない人の声だった。

めずらしく、早く帰ってきた父さんの声だった。

第五話：父親

今日の食卓は、いつもと違った。父さんがいる。

父さんにあのことを聞きたい。

聞きたくない。やめて。楽しい話をしよう？

聞きたい。

聞きたくない。

聞きたい。

.....

ご飯を口に押し込んだ。

「アオ、学校はどうだったんだ？新しいクラスはどうだ？」

と、父さんが聞いてきた。

そんなことより、僕はどうしたらいいか教えてよ。僕、この家じゃ、異質なやつだよ？はは.....

なんて、バカみたいなことを考えた。

押し込んだご飯を無理やり飲み込んで、口を開いた。

「ひろみくんと同じクラスになりました。知っている人も何人かいて雰囲気よさそうなクラスでした。」

「そうか、よかったな。」

と、父さんは微笑んだ。

母さんが食後のお茶を入れに台所へ行ったとき、僕はつい口を開いてしまった。

「そういえば、父さん、僕の誕生日は何日でした？」

少しだけ、僕の口元はにやついていたかもしれない。

「アオなに言ってるんのお??バカじゃない。自分の誕生日忘れたわけー??？」

姉がバカにして笑っていた。

しかし、父さんは意味がわかったようだった。

「アオ……」

一番上の姉がテレビに話題を移した。

しばらくして、母さんがお茶をもって戻ってきた。

父さんの顔は静かな顔になっていた。

その夜、僕が寝ようとした深夜十一時。

父さんが僕の部屋のドアをノックして、とても小さな声で父さんの書斎にくるようにと言った。

父さんの足音が去ってから部屋を出た。

いよいよだ。すべてがわかる。

動悸はしたが怖い気持ちは起こらなかった。なんだか本当に冷めた気持ちだった。どうしたんだろう。僕は死ぬのか？

死は、自然に迎えたとき、恐れもなく、戸惑いもなく、穏やかに受け入れられると、なにかで読んだことがある。

でも、実際死んだ人が語ったわけじゃないし、信憑性などない。

けど、今の僕の気持を表すには最もな言葉だ。

“コンコン”

「入ります。」

父さんの書斎は不思議な香りがする。古い本のおいだろうか。それとも、父さんのお気に入りの古い革張りの椅子だろうか。なんにしても、僕はこの香りを嗅ぐとなんだか落ち着いた心持になるのだった。

「アオ……」

愛しいものでも見るように僕のほうによってくる。

そんな目で見んな。

僕はもう知ってるんだ。

「話してください。」

僕は父さんをよけて革張りの一人がけソファに座った。

「アオ、お前、何でわかつたんだ？……どうして、……どこまで知ってるんだ？」

「どこまでつて……はは……父さん、なんかこれドラマみたいでおつかしいね。」

僕はこの家のちゃんとした子じゃない！！」

この言い方はなんともひどい言い方だった。僕自身も、しまった……言いすぎだと思った。でも、父さんは怒らなかつた。すまないでもいいいたげな顔つきだった。でも、僕の口が勝手に動いた。

「それに、なんと言つても僕の！僕の名前が証拠になつてる！！」

「アオ……ごめんな。父さんは愛した女性がいる。でも、アオ、お前も……いや、その女性以上にお前を愛しているよ。これだけは本当だ。だから頼むからこれから話す話を、怒らずに、恨まらずに、聞いてくれ。」

「いいよ。」

僕の声は自分でも驚くほどとても冷たかつた。

「私は、何不自由なく育つてここまで来た。今では小さな会社だが、前は結構な会社だったから父さんの人生は決められたようなものだった。だから大学では思いつきり遊んでやった。そこで、父さんはあの人に会ってしまった。碧に……」

父さんの口から僕の名前じゃない『碧』という名前が出て、初めて僕の頭はパニックになった。泣きたくなつた。

「碧とはある講義が一緒だった。なぜだか私は知り合つずっと前から碧が気になつていて、目で追つてしまつていた。そしてあの日 came きた。」

広場のベンチに一人で座っている彼女を見つけた。私は考えることもなく、体が勝手に動いて彼女に話し掛けていた。

『あの、僕と同じ講義とってますよね？昨日講義さぼっちゃってプリントとか、もらえなかつたんですよ……。もうすぐテストだし、ちよつとコピーさせてもらえませんか？』

彼女はきよんとしていた。私の言葉は作られたかのような用意された言葉だったし、おかしいと思われたかな、と思った。

『どの教授の講義ですか？ごめんなさい、私あんまり、人を知らないの……。』

単に私のことを知らないだけだった。

『ああ、こちらこそゴメン。いきなりだもんね、僕は桜井秀彰です。えつと、村上先生の講義なんだけど……。』

『ああ！それならちよつと今持ってます。よかった。はい、どうぞ。』

彼女は白い細い手で僕にプリントを差し出した。

『ありがとう。これ、今日借りていてもいいかな？明日もこの講義あるよね？その時返すよ。』

私はどうしても“この次”につなげたかった。

『いいですよ。明日よろしくお願いします。じゃあ、私次の講義があるんで……。』

といって彼女は去っていった。

私はプリントを返すときに彼女をお茶に誘った。プリントのお礼にという口実をつけて。そして、碧と初めていろいろと話せた。とてもうれしかった。講義のこと、趣味、最近の映画や、好きな本のこと……。そうして私たちは雑談をする友人になった。うれしかった。本当に何故だろうね……。私は彼女に“僕の恋人”になつて欲しいとはちつとも思つてなかつたんだ。ただ知り合いになりたくて、ただ話してみたくて、ただの友人でもいいから彼女と知り合いたかつたんだ。それが、何回目かの雑談で、家庭の話になつた……。私は将来は決められていたけれど、それも別にそれほど反

抗するようなことでもなかったし、父も母も厳しかったがとてもよく育ててもらっていた。という話をさらっとした。彼女はうつすらと優しく微笑んでいて『いいね。』とか『素敵な家族ね。』とか『幸せね。』とか言っていた。私が碧に碧の家族はどうなんだ？と聞いたとき、少し悲しそうな顔をして父親がアルコール中毒で、ひどい人だったから、碧が大学に上がるときに両親は離婚した。碧は母親についていき、貧しい家庭を助けるためアルバイトをいくつもかけ持ちしていて、それでも家庭が金銭的に苦しいから一度は大学を辞めて就職しようと思ったけど、でも、やっぱりどうしても大学で勉強をしたくて大学以外の時間をアルバイトに費やしてやっとだけれど大学に通えていることがとても嬉しい。と、恥ずかしそうに言った。私はこのとき自分はなんてバカな奴なんだと思った。決められた将来があるから、大学では遊ぶだなんて、なんて最低な奴なんだと思った。恥ずかしいのは私の方だった。それと同時に、碧を守ってやりたいと思った。必死に生きている碧を支えてあげられる奴になりたいと思った。そして……」

「手紙を出したんでしょ？」

「そうだ。ああ、あれを読んだのか、じゃあ、もうそこからはわかるだろう。父さんは何度も振られた。碧は自分はふさわしくないから、と。でも、あきらめなかった。人生を一緒に歩いていくのはこの人しかいないと感じていたから。そうしてやっと付き合えるようになったんだ。」

「じゃあ、どうして、父さんは母さんと結婚したの？」

「父さんの父さんと母さんは厳しかったと。ただらう？そのせいなんだ。父さんの父さん、つまりお前のおじいちゃんとおばあちゃんには世間体を気にした。『片親の子供となんか結婚するもんじゃない』とかなんとかね……。碧もやっぱり自分はふさわしくないと思うていたらしく、だんだんと私を避けるようになった。そして、大学も卒業して僕が会社に入る頃、碧は姿を消してしまった。私はあなたにはふさわしくありません。どうか、他の方と幸せ

を築いてください。という手紙を残してね。その時の私は何もかも捨てて彼女と駆け落ちするほど度胸がなかった。今思うとそうしていればよかったと、心から思うよ。……。私は気が抜けてしまつて空っぽになった。そんな時、父がお見合い話を持ってきたんだ。『お前の好きなタイプだろう』とか『この女性なら家柄もいいし、頭もいいし……。』とかどうでもいい御託を並べてね。私は別に碧の外見が好みだったからって彼女に惹かれたわけじゃないのに。

でも、空っぽだった私はどうでもよくて親の言いなりになつてそのままお見合いすることになった。実際母さんにあつたとき、外見がなんて碧にそっくりなんだろうと思つた。そこから興味をもつて、何回か会つて話を重ねるうちに母さんを好きになつたよ。これも嘘なんかじゃない。本当なんだ。母さんのことが好きだったから、結婚したんだ。そしてそれなりに幸せに暮らしてきた。お前の姉さん達が生まれて、会社も順調にいつて、おじいちゃんから会社を継いだ。そして……。忘れもしないよ……。十七年前の十一月十三日。私は、碧に偶然あつたんだ。」

あーあ、十七年前だつて……。僕は十四歳だ。僕の最悪の考え、そうはなつてほしくなかつたあの考えがきつとこれから父さんによつて事実になる。

僕は絶望したまま父さんの話を聞きつづけた。

「あの日、私は会社の用事で仙台に出かけたんだ。新幹線からおりて、駅から出て、バス停に並んだ。並んだ列の二人前、白いブラウスにロングスカートを着いた髪の長い女性がいた。そう、碧だった。まさか、と思つた。でも、次の瞬間には私は彼女の肩をたたいて“同じ講義を取つてましたよね？”と話しかけたんだ。彼女はビツクリした顔をした。それから一瞬ためらつて“はい”といつて笑つた。私は母さんのこともお前の姉さん達のことこのときは忘れてしまつていた。空気が、私達が、あの頃のままだった。私はその日、日帰りの予定だったが用事が延びたことにして仙台に泊つた。それま

でのことなどたくさんたくさん話したんだ。

それからは何ヶ月かごとに仙台で碧に会っていた。初めのうちは母さんも仕事だと思っていたようだ。が、二年目ぐらいから疑ってきた。最もそのころは本当に仕事も忙しかったから、そのうえ碧に会うのに嘘ついて家をあけるから家にいる時間がかなり少なくなっていたんだ。だから、母さんに気づかれてもしょうがない状態だったんだ。だけどそんなときに碧はまた別れを告げてきた。

「手紙でしょ？それも読んだ。」

「そうか。なら、わかるだろう？その後お前が碧のなかにいることがわかって碧がもう一度だけといって連絡してきた。そうなんだ。

今まで黙っていてごめんな、お前は碧の子供なんだよ。」

僕の心を無視しないで。苦しいよ。

黙って！！

「ごめんな。それで、碧はどうしても産みたいと言ったんだ。認知してくれなくてもいいから、とか、私の家庭には迷惑をかけないように子供と生きていくから、とかね。でも、それがダメになってしまった。碧はお前を産んで身体を壊してしまったんだ。もともと身体が弱いほうだったからね。そこで私が提案したんだ。お前を私の養子にとね。母さんはそのときまだ生きていたおじいちゃんとおばあちゃんに早く男の子を産んで欲しいとプレッシャーをかけられていて多少ノイローゼ気味にもなっていたから、私が母さんもおじいちゃんとおばあちゃんも説得してお前を養子とするのを認めさせたんだ。それから碧といっしょに手続きをすませて、お前を引き取った。母さんもおばあちゃんもおじいちゃんも碧や私の心配なんか一瞬で吹き消すほどお前をかわいがってくれたよ。でも、碧はそれを知る前に死んでしまった……。悲しかった。どうしようもなく悲しかった。お葬式にも大学の時の友人としてでた。それからはずっと毎年お墓参りに行っているよ。お前も今度一緒に行こう。」

何を言ってるんだらう。今までの僕をぶち壊すような発言をしておいて、何を言ってるんだ？僕の母さんはこの家の母さんだけだ。

「これがすべてだ。私がお前に話せるすべてだよ。さあ、もう遅い。寝よう。なにか知りたかったらまた聞きに来るといい。でも、母さんにこのことは言わないでくれ。このことは母さんは知らないんだ。頼む。」

なんて情けない父親なんだろうか。こんな親はいらない。

でも、でも、僕のたった一人の父さんだ。父さん……僕を支えて。壊れないように……

「わかった。」

それだけ言って書斎をでた。自分の部屋に入ったとたん涙が頬をつたった。僕の存在は家族のなかで異質なやつだった。十四年間の僕は嘘ものだった。父さんは情けない男だった。父親ではない情けないただの男の姿を見てしまった。それでも父さんだけが本当の僕を知っていて、しかも本当の僕を本当に思ってくれている父さんだ。

僕を壊した父さんが唯一の支えみたいなものになってしまった。僕に未来なんてあるのか？

母さんは僕を本当に愛しているだろうか？

あれほどまで憎いと思っていた人の子供を愛するだろうか。

母さんはきつとうすうす気づいている。

僕が『あの人』の子供かもしれないことに……

父さんは平気で母さんに嘘をつく。だから母さんもすぐに疑う。二人とも家族を、自分を守りたくてやっていることだろうけど、僕はどうしても悲しかった。

僕が悲しくなつたところで何も変わらないけど……

ねえ母さん、父さん、僕を家族だと思ってる？

僕を愛してる？

僕を……

母さんは……

憎んでる？……

それがたまらなく怖いんだ。

第六話：いじめ

僕はもう何も考えなくなった。

どーでもいい毎日。過去は過去だ。今の僕を縛り付ける資格はない。でもやっぱり時々頭の中に浮かんできて怖くなる。

そんな毎日だった。

そんな僕にとって今は学校が一番安らぐ場所だった。授業は集中してれば他のことを考えなくてもいいし、休み時間はひろみや秀作、二年から仲良くなった楓や祐樹なんかと話してバカなことをしていると楽しかった。

でも………

このぼつかりあいた、空虚な感じは何なのだろう。

家であんな事があっても学校（学校）ではこんなに普通に振る舞っている。

これは僕が望んでいることだ。

でもなんで？

これが、このことがなんだか無性に悲しくなったりするときがある。きっとそれはひろみも一緒だ。

相変わらずひろみは毎日塾に通っていた。

毎日毎日学校が終わるとすぐに塾に行く。

そのおかげかひろみの成績は右肩上がりだ。

父さんや僕の二人の母さんについての思いを打ち消すために勉強をして成績をそこそこ取っていた僕をもうすぐ抜きそうだ。

「ひろみ、今回の中間すごくくない????僕より全然いいじゃん。」

「でも、数学は負けたよ。」

「それ以外は、勝ってるじゃん。あと返ってきてないのは社会だろ？」

「どっちが勝つかな……????」

「僕だな。」にやつとして見せた。
「悪いけど、俺、社会一番の得意科目だよ??？」と、ひろみもにやつとした。

社会はその日の5時間目に返ってきた。

先生が「よし、テスト返すぞー番号順に取りに来い。」といった。
上田がもらって遠藤がもらって小川がもらって……次は木庭だった。

「木庭あ……おまえ……少しは勉強して受けるよ。」と、先生が小声で言った。

木庭はムスツとして無言で席についた。
なんと今は木庭のすぐ後ろがひろみだった。

頼むからひろみ、何にも言うなよ……。
ひろみは何も言わなかった。

「桜井。」
ひろみと木庭に気をとられて自分の番になってるのに気づかなかつた。呼ばれて答案を取りに行った。

「まあ、いい成績だが、この前より落ちてるぞ。頑張れよ。」
と、木庭に言ったように小声で僕にも言った。

「はい。」
答案を受け取って席に戻った。
点数を見てみると、八六点。

確かに下がっていた。まあまあな点数だけど……。
こりゃひろみには負けたな。
まあ、ここ最近勉強はしてたけど、覚えてるかどうかは謎だったしな……。
しょうがない。

「お前、すごいな。どんどん点数上がってるぞ。これからもこの調子でな。」

ひろみが答案をもらっていた。
ひろみがちらつと答案をみて、まっすぐ僕の席にやつて来た。

「アオ、どうだった？」

「まあまあ。ひろみは良かったんだろ？」

「まーな。」

「何点だったんだよ？」

「96」

「マジで！？すごいじゃん！！！！」

「でも、今回のテスト簡単だったし・・・きっと、平均点高いぜ。十点代のやつなんてちょーバカしかないよ。」

ひろみがそう言ったとき、木庭がすごい顔でこつちを睨んだ。

その時ちらつと見えた木庭の点数は十六点だった。

ヤバイ。

木庭が完璧にひろみにキレた。

こつちに来るか？

と、思ったがこの時は何事もなく終わった。

・・・勘違いか？

もし、木庭にあれが聞こえていたらただじゃすまないだろ？

聞こえなかったのか？

クラスがえをしてから、僕はいつも木庭とひろみを注意してみている。なんとなくだけど、この二人は危ない気がした。一度こじれたら大変そうだ。

授業が終わって帰りの時間になった。ひろみと帰ろうかと思って、ひろみを目で探した。が、ひろみは教室のどこにも見当たらなかった。カバンはあるから、まだ帰ってはいないんだろう。どこに行っただんだ???

しばらく待ってもこないから、僕は先に帰ることにした。

階段をおりて、昇降口にでた。靴を履き替えて、外にでる・・・
。なんだか、人が殴られるような鈍い音がきこえた。

・・・気のせいかな？

そのまま僕は家に帰った。

家はただ、いにくいだけの場所になっていた。

自分が異質だという事実。それに気づいているかもしれない母さんに優しくしなければならぬ気がした。そして、唯一僕の本当のことを知っている父さんはあれ以来優しく接してくれるけど、正直僕はどうしたらいいか分からなくなっていた。父さんは優しいけど、絶えず僕があのかをしゃべってしまったわいか、そして家族を父さんの、大事な家族を壊してしまわぬか見張っているようでもあった。だから僕は懸命に何も知らないころの僕を演じて、少しでも母さんに優しくなった。自分の部屋に入ってほつとして、本当の自分に戻ると、疲れと、悲しさと、虚無感と、そして孤独が僕を襲って泣いてしまっていた。

なんてつまらない毎日なんだろう。

何の喜びも楽しみもないただただ繰り返される演技と慰めの日々。僕はもう、うんざりだ。

でも、死ねなかった。

本当は父さんから事実を教えられたあの日に、死んでしまおうと思っていた。

だけど、死ねなかった。

こわくて、こわくて、こわくて……。

毎日が嫌で、生きてるのが嫌で、死んだほうがきつと、僕のためにもなるのに、それなのに、僕は怖くて死ねないんだ。

「死ぬ」ということが、怖い。

この世にいらなくなってしまうのも、怖い。

僕はなんて臆病なんだろう。

疲れた……。

人間にもスイッチがついてるといいのにな……。

次の日、一時間目が体育だった。

ジャージに着替えて、体育館に向かうときひろみと話していた。

ひろみはなんだか、今日、元気がない。笑ってもすぐ真顔に戻る。いつものような、はつきりとした言葉も言わなかった。

「僕、最近腹筋ないんだよ。やばいやばい、弱ってる!!!ひろみは?」

「といって、ひろみのおなかを触った。すると……」

「いてえ!」

「といってひろみがびくつと身をすくめた。」

「え?」

「……」

「お前もしかして……」
「やな予感がした。」

昨日の昇降口付近での、鈍い音を思い出した。

「ちよつと……筋肉痛でさ。俺も弱ってる!」

と、ひろみはおちゃらけたが、僕の頭の中にはもう予想がついていた。

「ひろみ、お前、昨日、放課後どこ行ってた??」

「べつに……トイレとか。」

「木庭に殴られたんだろ?昨日のテストのことで。」

ひろみは一瞬だまった。そして必死な顔で言った。

「お前の言うとおりだけど、誰にも言うなよ。木庭だけじゃなくて他の奴らにも取り囲まれてランチされた。だけど、平気だから、絶対に誰にも言うなよ。」

それからお前も絶対に関わんなよ。」

「ランチ……。だけど、お前、それじゃあ……」

「いいから、絶対に関わんな。やばい!授業始まる!!!いそご!」
走って体育館に行き、そして、バスケをやった。木庭のグループのやつらは普段となんの変わりもなかった。

それから夏休みまで、まるで何も無いように毎日が過ぎていった。

ただ、毎日放課後、ひろみはいなくなつた。

夏休み。

僕は、家に居たくなくて、ほとんど毎日外出していた。友達の家に行ったり、図書館で勉強したりしていた。

ひろみとはほとんどあつていない。

普段の塾に加えて夏期講習にも行っているらしかったから、会うヒマがないのだ。

八月十日、夏休みもいよいよ折り返した。

僕はその日、図書館で勉強をして、お昼をたまたまいつもの行かないマツクで食べた。そこで、僕はとんでもないモノを見た。

ひろみだ。

はじめ、ひろみも塾の合間に塾の友達とお昼を食べに来ているのかと思つた。

しかし、一緒にいる奴らをよく見ると、なんだか知ってる顔ばかりだ。

クラスメイトだ。ひろみのとなりに座っている、よく顔の見えない奴は誰なんだ？

・・・・・・・・・・・・・・・・

木庭だ。

どういうことだ？

まさか、いじめか？

ひろみと木庭の集団が店を出る・・・、僕は後をつけることにした。ひろみたちは人気のない公園に入った。

「マツク、ごちそーさまあ。でもさあ俺らまだおなか減つてんだよね。」

と、木庭のグループの奴らがひろみを囲んで話し出した。

「そーそー。だけど、俺達あいにく、いま、金もつてねーんだわ。」

「南山くんは、秀才君だから、将来きつと金持ちになるじゃん？だから、今くらいさ、俺らに金貸してくれても、いいよね？」

「だからぁ・・・金よこせつつてんだよ。この、クソが。」
と行って、ひろみに誰かが蹴りをいれた。

それをきっかけにして、全員がひろみになぐりかかった。
リンチだ。

ひろみに、忠告されていたのと、恐怖から僕は動けなかった。
そして、ひろみはぼろぼろになって、財布から金を出した。

そうしてやっと、木庭たちはいなくなった。

僕はひろみに駆け寄った。

「お前なんで金あるなら先にださねんだよ。」
ぼろぼろのひろみがうつすらと笑って

「どっちしろ、あいつら、俺を殴る気だから・・・。もう、順番
立てみたいに決まってるんだ。」

「もう」って・・・今までも、金取られてリンチされてたの
か？」

「そうだよ。でも、平気そうだったろ？大丈夫だよ。俺なら。

だから、絶対に手出すなよ。」

そう言ってひろみは衣服を整えて塾へ向かった。

・・・。そんなこといっても、毎回あんなふうに殴られたら死
んでしまう。

何とかしなくちゃ・・・なんとか・・・。

ひろみを、恐怖から助けられなかった自分が、なんて奴なんだろう
と思っただ。

情けない。

卑怯だ。

最低だ。

だから、今度は助ける。

ひろみは、友達だからだ。

僕の大切な友達だから。

それから、僕は夏休みの間、何度も、そのマツクに足を運んだが、ひろみや木庭には会わなかった。どうしたらいいんだろう。ひろみはきつとまだ木庭達からリンチをうけているに違いない。なんとかして止めたい。やめさせなくちゃ。

夏休みの最終日。

僕は思いついた。

秀作にも、言ってみよう。

きつと、僕と、ひろみの力になってくれる……。

トウルルルルル……

ガチャ、

「はい、もしもし、遠藤ですけど、何か用？」

なんつう電話の受け方なんだ……絶対に秀作だな……

「アオだけど、秀作？」

「あっなんだ、アオかよ！ひさしぶりじゃん。何？なんか用？」

「あのさ……ちよつと、相談があるんだけど……」

「なんだよ、めずらしいじゃん。でも、俺、宿題まだ終わってないんだよね……写さしてくんない？そんな時間くからさ。やりながら。頼むよ！」

「いいけど……真面目に聞けよ？」

「わかってるよ。あたりまえじゃん。絶対だよ！じゃあこれからお前ん家いくから。じゃな。」

ガチャ

……。騒々しいな、あいつ……。

ぴんぽーん

二階の窓から秀作にあがってくるように言った。

「じゃ、さくつと写しますか!!」そう言つて、秀作は宿題のワークを取り出し、写し始めた。

僕はそのわきで読みたいもないマンガを読むふりをした。

「っしゃ!写し終わった。で、なんの話?」

「あのさ、実は、僕って言うよりも、ひろみのことなんだけど・・・あいつ、今いじめにあつてるんだ。」

秀作の顔は一瞬固まった。そしてへらつと笑つて

「あれだろ?あいつ、なんでも結構言つちゃう奴だから、誤解されて、相手をちよつと怒らせちゃつただけだろ?一回で収まるだろ、そんなん。」

僕は真面目な顔のまま言つた。

「きっかけは、そうだったかもしれないけど、もうそんな時限じゃない。知ってるだろ?あの木庭の仲間達に、あいつ、たぶん夏休み中金取られて、ランチにあつてる。」

秀作は、黙つたままだ。

「で、僕は何とかして、それを止めたいんだ。秀作だつてそう思うだろ?だつて、あいつの友達だろ?」

秀作はそれでも黙つたままだつた。

「なあ、だからさ、いっしょになんか考えてくれないかな。どんな感じで止めたらいいかとか。それとか、いっしょに止めに入ってくれないかな。」

秀作は、困つたような顔でやつと口を開いた。

「あのさ・・・それってさ、俺ら、関わんないほうが、いいだろ。確かに、ひろみは友達だし、いい奴だよ。でも、相手が木庭だろ?あいつらマジ、やばいもん。高校のヤバイ奴らともつながつて、何やってつかわかんねえ奴らだぜ。俺らまでそんな奴らに絡まれたらやばいって。それに、金渡しときゃだいじよぶだろ、まさか殺したりはしないって。」

「そんな・・・。」

愕然とした。

秀作はこんなやつだったっけ？

いや、秀作の言ってることもわかるんだ。そうしたほうが安全だ。でも……………

「秀作。お前本気でいつてんの？」

「そうだけど……………マジ、おまえ、関わらないほうがいいって。それに、そのうち木庭達も飽きるだろうからさ。な。じゃあ、俺帰るわ。これ、ありがと。」

そう言っつてワークを机の上に置いて秀作は帰った。

こんなことつて、あるのか？

僕の生きてきた世界はこんなだったのか？

僕の求める友達像は、確かに楽しいことだけだったけど、だけど、実際やつぱり、友達は助けたい、助けなきゃいけないって思っつていたのに……………。

現実つてこんなもんか。

こんなところが、僕の生きている世界か。

なんて、バカらしい世界なんだ。

美しい世界か……………。

何であつても、僕はひろみを助ける。

僕は僕の思つたようにする。

必死で生きているひろみを、僕は知つてるから。

だから、もし、次に見つけたら、どんな状況でも、僕が止めに入つてやる。

変な計略はなくても。

次の日、長い二学期が始まつた。

教室は夏休み前とは、違う空気をしていた。

三分の一くらいが日焼けをしていて、何人もの人が髪を切つてあつた。

木庭たちのグループは髪が茶色のやつが何人かいた。

その茶色たちは教室の後ろのほうでなんだかガチャガチャやっていった。

安心したのは、そこにひろみがいなかったこと。

ひろみは楓や祐樹と話していた。

顔に傷もない。

よかつた。ほんとに。

もしかしたら、秀作の言うとおりだったのかも・・・木庭達は飽きたのかもしれない。僕はやっぱり怖かつたんだと、このときわかつた。

それからしばらくしないうちに担任がやってきて、始業式が始まるから並べとிட்ட。僕はひろみの後ろに並んだ。

白い制服がいつぱいつまった体育館はむしつとしていていかにも夏な雰囲気をかもし出していた。

暑い。

どうでもいい校長の話が長々と続いている。

ひろみの後姿をボーッと眺めながらいじめのことを考えていた。

木庭達は本当に飽きたのだろうか。

ひろみはなんでなんにも言わなかつたんだろうか。

僕のため？

アーーーーあ・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

その時ひろみの首の辺りから肩にかけて黒っぽいアザのようなものを見つけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

この間のアザか？

でも、二週間以上も前のアザがこんなにくつきり残っているだろうか。

まさか……

ざらつとしたいやな思いが湧いた。僕のアんな考えは甘かったのかもしれない。

木庭がそんなに簡単に飽きるなんて程度でひろみをリンチしていたわけがない。

ひろみをうざがってる、憎らしいとまできつと思っているだろう。

飽きたりなんかしない。ヘタしたらきつと、殺すかもしれない。

秀作は“殺しはしないでしょ”といったが、木庭は切れたらヤバイから……わかったもんじゃない。

その後、僕はひろみにそれとなく夏休み中のことを聞いてみたり、なにをしてたかや、何か悩んでないかなんかを聞いてみたりしたが、ひろみは木庭については何も言わなかった。

いったいどうしたらいいだろう、これじゃあ助けようにも助けられない……。

木庭はそれをわかっているのだろうか。学校では、少なくとも僕らの前では、ひろみをいじめているそぶりを見せなかった。

「ごめん、今日遊べなくなった。やっぱり、塾行くことにした。ごめんな。」

と、帰りのホームルームが終わったときにひろみが言ってきた。

「お前、今日はカンペキ休みだったじゃなかよ。」

「だから、ごめんって。休みんだけど、数学、ちょっとわかんないところあってさ、塾の先生に聞きに行きたいんだよね。ホントゴメン。今度なんかおごるからさ。」

「いいよ、おごんなくて。」

だつてお前木庭に金取られてるから、大変だろ。……と言おうとしてやめた。

ひろみはもしかしたら、この後、本当は塾になんか行かないんじゃないのか？

もしかしたら、木庭に呼び出されたのかもしれない。

「勉強頑張れよ。じゃーな。」

それだけ言つて別れた……。フリをした。

ひろみの後をつけよう。

僕はそう決めていた。

僕は荷物をもつて教室から出て、廊下の角を曲がってから、足を止めた。

それから教室の出入をじつと見張った。十分後くらいにひろみと木庭達が出てきた。

やっぱり。

それからひろみと木庭達の後をつけていった。

木庭達はひろみを取り囲んで歩いている。なんだかうまく聞き取れないが、時々ひろみににやにやしなから話し掛けている。

木庭達は、学校から二十分くらいの所にある児童公園に行った。僕は公園には入らずに公園を囲む背丈の低い木々に身を潜めた。

その児童公園は狭くつて草が生え放題で、遊具なんてものは色が剥げ落ちたシーソーが一つと馬の形をした乗り物だけで、子供達には見るからに人気が無いようで、木庭達の他に人っ子一人いなかった。木庭達の声も、僕まで十分届くくらいの広さしかない。

「お前それでさあ、取つてきた？」

「俺らが頼んどいたやつ。まあいつものだけどさ。」

「黙つてんじゃねえよ。一週間も待つたんだからよ。」

「これ。」

と、ひろみがお金を差し出した。五千円だ。

「んだこのっこんなんじやたんねえんだよ！てめえのがねえんなら

親のから取ってこいっつたろうがよ！」

と、一人がひろみに蹴りを入れようとしたその時、ぼくの身体は勝手に走り出していた。そしてそいつを殴り倒した。

ひろみが親の財布からお金なんか取れるわけ無い。ひろみの大好きな親の財布からなんて……。考えたら泣いてしまいそうだった。

「なんだお前！」

周りのやつらが睨みつけてきた。

「アオ！」

ひろみが叫んだ。

次の瞬間僕のおなかに蹴りが入った。

おなかのモノが全部出てしまいそうな感覚がした。

そして他のいろんなやつらに殴られそうになった。

それでも、僕は木庭だけでも殴ってやろうと必死になって取っ組み合った。

すると、ひろみも木庭達に殴りかかった。

鼻から鼻血が流れ出て、口の中が切れて、そこらじゅうが痛くなつて気を失うかと思つたころ、

「お前から何やってんだ！」

という声が響いた。

帰宅途中の先生に見つかってしまったのだ。木庭達はすぐに「やべえ、」

といて逃げ出した。そのときだった木庭がスゴイ顔で僕のほうを見て「おぼえてるよ、桜井アオ」とだけ言った。

怖かった。

でも、僕達も先生につかまるわけにもいかないから、恐怖を抑えてひたすら走った。

僕達はいつもの公園のすべり台の下に隠れた。

ひろみが僕を睨みつけていった。

「何してんだよ。バカ。」

「バカはないだろ。」鼻血を手でぬぐいながら笑っていった。
「バカだよお前。お前……」

ひろみは泣いていた

「バカだよ……バカだよ、ほつとけよ……」
「ありがとう、ごめんな……ごめんな……」

僕は「何謝ってんだよ。」と、笑って行ってやるつもりが、目に涙が滲んできて、息が絶え絶えになってしまふほど、小さいころのよう泣いてしまった。

それから、お互い何も言わないで、涙がかれた後、それぞれの家に帰った。

僕があの日何を考えて木庭に取っ組みあつたのか、あんまり覚えていない。

ただ、必死だった。それだけ。

それからずっと、取っ組み合うことは無く、一方的ないじめとなつた。

木庭達の、僕へのいじめとなった。

ひろみには、知られたくない。

ひろみはあの1週間後位から学校にこなくなっていた。

よかった。

ひろみが、勉強に集中できる。お母さんとも、うまくやっているかな。

僕は、ひろみとは違って、親なんか……どうでもいいから、ニセモノの僕の幸せな家族なんてどうでもいいから、お金なんていくらだって盗めるから、よかった……。

ごめんね、父さん、弥生姉、さき姉。

ごめんね……ごめんね……

母さん

僕はもう、死んでしまいたい。

でも、死ねない。

それすらできない。

バカみたい。

ただただ、なぞるんだ、苦しい毎日を。

いじめはだんだんとひどくなって、初めはひろみのように学校外でリンチされて金を取られるくらいだったけど、しまいには学校での生活はすべて木庭達に支配されて、授業を妨害させられたり、給食にゴミを入れられたり、殴られたり……。あげればきりが無いけど、それでも、それでも、僕はただただ生きていた。何にも見ないで、目を閉じて現実はずしく暗いから。

なにかもを無視して、そう、自分をも無視して生き続けた。

そんな時に、あの笑顔が、現れたんだ。

第七話：青子

それからの毎日は苦痛だらけだった。

しかし、その後、三年に進級する時にクラス替えがあり、運がよかったのか、僕は木庭達のグループの誰一人とも同じクラスにはならなかった。

それでも、進級してすぐのころは二年の時のように放課後呼び出され散々お金を払わされて、リンチされた。

でも、受験が近づきはじめるとさすがの木庭達もそれに必死にならざるを得なかった。バカな高校ですら上がれないような成績と頭と行為しか、あいつらは今まで持つてこれなかったからだ。

少しだけ、いい気味だと思っってしまった。

僕はというと、勉強は唯一の逃げ場であることに変わり無く、あれ以来続けていたおかげで何とかそんなに必死にならなくてもいい高校に入れたのだった。

受験勉強をしていたとき、時々『いい高校に入ったら、父さんや母さんは喜んでくれるかな』という淡い考えが浮かんでいたが、すぐにそれは打ち消され、あの日父さんに聞かされた真実が心の中にかめぐるのだった。

そんな風に僕の心の中にはいまだに大きな暗やみが始終居座っているのだ……。

合格発表の時もそうだった。

1146

僕は掲示板を見た一瞬で自分の番号を見つけた。

一瞬意味がわからなくて、ずっとまわりが歓喜や悲劇の声をあげているなかで、ただぼうつと突っ立って自分の番号を見つめていた。するとだんだん“受かった”という声が頭にじわーっと広がってき

て、ものすごく久しぶりに心が喜びの興奮でみたされた。

そうして改めてあたりを見回してみると、僕と同じようにただじつと掲示板を眺めている女の子がいた。

この子も僕と同じように感じているのかな、と一人でほほえましくも思ってしまった。

それから、合格証書と、入学の様々な書類と春休みの課題を受け取り、これから通うだろう学校を後にした。

帰宅途中に電話をして親に知らせると、一緒に合格発表を見に行つた奴がいった。僕は意気揚揚として「僕も」といった。まだあの心地よい興奮は冷めていなかったのだ。

しかし、公衆電話ボックスに入り、受話器をとった時、さっとそれが引いてしまった。あの暗闇が落ちてきた。

隣では本当に嬉しそうに合格を報告する友達の姿があった。

僕はそつと受話器を置いて、ボックスからでた。

僕が報告して何になる？

いや、きつと父さんは喜ぶ。母さんだつて喜んでくれるだろう。今言えば帰るころには母さんがお赤飯を炊いて待っていて父さんはケーキを買つて早めに帰ってくる。それは嬉しいことだ。そんな幸福な家族はそうそうないかもしれない。でも……それは嘘だ。父さんを疑う母さん。

母さんや家族を騙す父さん。

そして……その原因の異質な僕。

とんだ茶番劇だ。

こんな役者でホームドラマをやっても、どうせ僕は部屋に入ったら泣くんだから。しょうもない。

そうしてまたもとの大きな暗闇に戻った。

結局帰ってから合格を知らせても、母さんは晩御飯にお赤飯を出して「受かると思っていたから用意していたの。」と、嬉しそうにいった。

母さんから連絡がいったのか、父さんもケーキを買って帰ってきた。姉さん達はあんたのおかげでケーキが食べられて嬉しい、と変に喜んでくれた。

ホームドラマをやった。

姉さん達が羨ましかった。僕もちゃんとしたこの家の子供になりたかった。

部屋にかえってから泣くことも、僕の想像したとおりだった。

そうして、僕は高校生になった。今はもう二学期だ。

だいぶ高校の生活にもなれた。

高校は中学ほど甘くなかった。逃避のための勉強だけでは、授業についていけなくて、予習は欠かせなかった。でもその忙しさは、僕にとってはありがたかった。余計なことを考えなくてすむ。

クラスはさすがの進学校だからだろうか、なんの問題も無くとも居心地がよかった。でも………。なんだかそれはだんだんと僕の首を締め付けるようになっていた。幸せな人が多いのだ。

この学校は。そして純情にこの世の中のことにもうまく馴染んでいく人たちはかりだ。表面だけの友達を、僕はたくさん作った。それで十分だった。

絶望が居座る毎日。僕はただただすべるように毎日を送った。

放課後学校に残って勉強をして帰るころ、日がもう沈むときだった。薄暗いけど、ぼわあっとした光が空にそして街に広がっていた。

歩道橋を登ったとき、一人の女の子がいた。

その女の子は歩道橋の真ん中に立っていた。

「何してんの？」

口が勝手に動いていた。

「何してると思う？」

女の子が笑っていった。

「わかんない。」

「わかんないの？しょうがないな、ここに立ってみて。」
と、女の子が立っていた場所に立たされた。

「これって……。」

下の車がびゅんびゅん動いて、まるで……僕が動いてるみたいだ。
「ね。飛んでるみたいでしょ？気持ちいいでしょ？死にたくなつたらここに来るの。私、生まれ変わったら絶対にトンビになるから。」

「トンビ？普通の鳥じゃダメなの？何でトンビ？」

「トンビじゃなきゃダメ。ああいう風に空を飛ぶの。」

と、女の子は歩道橋の真ん中で腕と長いストレートの髪を広げた。
飛んでるみたいだ。

「名前は？」

と、突然女の子が聞いてきた。

「アオ。」

「アオ？私と同じ名前ね。私、青子って言うの。」

「青空のアオ？」

「そうだよ。きみは違うの？」

「ちがう。碧玉のアオ。」

「じゃあ、みどりのアオだね。」

みどりのアオか……。そうか、そうだな。となんだか父さんから真実を聞いて今まで憎らしかつたこの名前を、受け入れることができた。

そうして青子に目を向けた……。

その時、目が合った。あの、瞬間に僕の人生は意味のあるものになった。

青子と目が合ったんだ。

絶望的な、この世界に、僕の世界に笑い声をくれたんだ。

たとえ青子が女の子じゃなくて、男の子だったとしても、人間でなくても、鳥でも、木でも、なんでも、きっと僕は出会ったと思う。

青子に。

その日は、そのまま別れた。
ただ、なんとなく出会って別れた。また会えるという不思議な確信があった。

その確信は当たった。

次の日の昼休み、友達に言った。

「ゴメン、なんか気分悪いからちょっと休んでくる……。先に昼、食べてて。」

「大丈夫か？保健室？次休む？」

「や、ちよつと……トイレとか、行ってみる……。」

そうして屋上に続く階段に足を運んだ。

僕にはそこに行く癖があった。

どうしようもなく疲れたとき、どうしても笑う演技ができなくなつた時、ここにくるのだ。

この屋上に続く階段は、誰も近づかない場所だった。

“屋上に続く”とは言っても、屋上にはいけないのだ。屋上への入口の扉はびつちり閉められ、鍵が二つもかけられていて、その上針金まで何十にもまかれていた。窓には板が貼り付けられ、屋上に広がっているだろろう光を全く遮っていた。

だから、誰もここへ来ないのだ。

来ても無意味だから。

たまにいちやいちゃしたカップルがいたりするけど、僕の階段をのぼる音をきくと、彼らのほうからすぐいなくなるのだった。

だから、ここは僕の地球上の居場所。

僕が僕でいられる場所なんだ……。

そしてまたいつものように、一番上の階段の踊り場にねっころがつて、ただぼーっとしていた。

きゅっきゅっきゅっ……

誰かが階段を上る音がする……
なんだかきれいな音だ……
鳥が飛ぶような……
きれいな……
「あれ？」

突然僕の顔の上に髪の毛の長い見覚えのある女の子の顔が現れた。

「アオ君じゃない？」

「青子……さん？」

「あはは、そうそう、“青子さん”だよー。」

そう言ってくるつと回って見せて、隣りに座った。

「あーあ……ここ、私だけの秘密の場所だと思ってたのにな！君もよく来てたの？」

僕は起き上がりながら答えた。

「僕だつてこんなトコくるの僕だけだと思つてた。」

「そう。私、入学してから結構すぐ、しかも結構きてたよ？」

「僕も。」

……。

「あはは……なんの比べあいつこなの！！？あはは……でも、君ならいいかな。ね。」

と、こつちを見る。

僕も、同じことを思っていた。

この子なら、いいな。つて。

「でも、あれだね、二人ともよく来てたのに、今まで会わなかったなんて、不思議だね。」

「ああ、僕、透明になれるからさ。」

と、にやっとして見せた。

「なにそれ！！あははは……」

それにしても、青子はよく笑うな。

青子の笑う顔はなんだか、僕を嬉しくさせた。

「たまにカップルとかいない??」

「ああ、いるいる。」

「で、私が出る音がわかるのか、来るころにその人たちのほうから、いなくなっちゃうの。」

「そうそう!!」

「なにしてんの?ここで。」

「僕?なんにも。なんにもしてない。」

「あ、私といっしょだ。ここ、なんにもしないことをする場所なの。あれ?なんか、私の言葉変?意味、伝わってる??」

「あはは、僕が頭いいから、わかるよ。」

「なにそれ!!」

「あ、予鈴だ。」

「行かなきゃ。」

「じゃあ」と青子にいった。

すると、青子は僕のまねをして「じゃあ」といった。

僕のなかはドキドキしていた。

それも居心地のいいドキドキだった。

なんだか、幸せだった。

家に帰ってから僕はなんだかふわふわしていた。

明日も青子に逢えるかな?

なんて考えたりしていた。

どうしてなんだろう。

他に、家族の、そしてこの僕のこと以外ずっとどうでもよくて考えないでいたのに。こんなにあの女の子のことを考えているんだろう。次の日の放課後、僕は屋上へ続く階段の一番上にいって、寝そべって音楽を聴いていた。

「わっ!」

目をあけるとまた昨日と同じ顔があった。

「青子……さん」

青子はにこっと笑って「さん」付けるの変な感じしない?」とい

った。

「青子」

「照れるウ」

「ばーか」そういつて起き上がってヘッドフォンを外した。
青子は隣りに座った。

「何聞いてたの？」

「ピンクフロイド」

「あ！私も！好き！」

「聞くの？」

「うん。」

「アナザー・ブリック・イン・ザ・ウォールとか好きなの。」

「ああ、いいよね。」

「何が好きなの？」

「みんな好きだよ、結構。」

「じゃあ、特に！」

「うん・・・アルバムでね、ファイナルカットが好きかな。特
にならね」

「最後の？」

「そう、聞く？」

「うん」

ヘッドフォンを差し出した。

青子が受け取って、つけた。

スタートボタンを押す。

きつと一曲目が流れているだろう。

青子は目を閉じてじっと聞いていた。

青子はいつのまにか泣いていた。

ずつ、と鼻をすすりながらヘッドフォンを返してきた。

「いい曲だね。」

「うん」

僕はただじっと座っていた。

次の日の放課後は、青子が先に来ていた。
なんだかじつと本を読んでいる。

「何読んでんの??？」

「桜井くん!!」

「桜井くんです。」

「碧？」

「はい。」

「あのね、詩。」

「どんな？」

「骨」

「は？」

「中原中也の。」

「教科書？」

「うん。教科書にのってたの。今日の現代文の時間に見つけたの。」

「で？なんでまた読んでんの？気に入ったの？」

「ん・・・ていうか、なんだか、気に入ってたて言うか、気にな
るっていうか・・・なんか、うん、なんか、ね、こっ、どう思っ
？」

そう言つて、教科書の一文を指差した。

“生きてゐた時の苦勞にみちた

あのけがらわしい肉を破つて、”

「どう思つて・・・どういうこと？」

「私、なんだかわからなくて、生きていたときの苦勞にみちている
のは骨なの？そうしてこの、この肉体はいつたいたいなんだっていうの
かしら・・・。」

そういつてまた、じつと見入っていた。

「骨だ。」

「え？」

「僕は骨だと思っ、苦勞にみちているのは。骨だけが白いだろ？この身体で。そうして、この世界とじかに触れ合っていないじゃないか。骨は。肉体は、この世界と同化するためのものだから。汚らわしいんだ。」

「じゃあ、この世界は、けがらわしいの？」
はっとした。

僕のこの世界は汚らわしいものになってしまっているけど、もし、青子の世界は違かったら……？
もしそうなら……。

僕が一生守ってあげたい。

青子の未来に、この人生に、青子があきらめて腐ってしまわないように……。

僕は微笑んで、青子の問いを曖昧にごまかした。

僕はこのときから……だと思っけど、青子が笑っことを、探すようになった。

お笑い番組をチェックして、手品の練習をした。

またの日、僕は太宰治の小説を寝そべって読んでいた。

「目え、悪くするよ。」

と、小説を取り上げられた。

「ふうん、人間失格。」

「なんだよ。」

「私も読んだ。」

「で？」

「途中で挫折！」

「なんだよ。」笑って、小説を取り返した。

青子も手に本を持っていた。

それを指差しながら「それ、何？」と聞いた。

「中也。」

と表紙を見せてきた。

“ 中原中也詩集 ”

「……………」

しばらく二人とも、読書していた。

“ 雨があがつて 風が吹く ”

いきなり青子が言った。

「 雲が流れる 月かくす

皆さん今夜は春の宵

なまあつたかい風が吹く ”

青子にはっこり笑って「じゃあね。」

といて帰った。

あ…………今日はなんも笑わしてないや…………でも、笑ってたな。

また次の日。

青子は中原中也の詩集を読んでいた。

「君ねえ、明日からテストだよ。」

「知ってますよ。てか、君こそいいんですかー？こんなトコにきてて。」

「僕はこつこつタイプだからいいの。」

「じゃあ、私も。」

「なんだよそれ。あっ！今日新しい手品、できるようになったんだ。」

「どれっ！！！」と、青子はすばやく中也の本を閉じた。

トランプを取り出して、よく、テレビでやってるきり方をした。

「一枚とつて。で、覚えないで。」

「え？」

「うそ、覚えて。」

「ふふ、なによっ」

「戻して。」

青子はそつと戻した。

しゃっしゃつと、トランプをきった。

「見てて、青子を選んだのだけ、表になって出てくるから。」

青子の目の前にしゅつとトランプを広げた。

ハートの2だけが、表になった。

「すごい!!!」

「あたり?」

「あたり!!!すごい!!!碧、才能あるんじゃない???」

と、笑っていた。

ずうつと、続くといいな。

こんな毎日が。続くといいな。そう思っていた。大嫌いだっただ毎日が続くということが、いとおしくなった。

なぜなんだろう。

わからないけど、放課後、屋上に続く階段に行くのが待ち遠しかった。冗談を言つて、覚えてたての手品を青子にみせて、お互いにもくもくと本を読んで、そんなことが、うれしくて、世界が、明るく見えた。

死んだように生きていた毎日を、忘れてしまうほど、素晴らしかった。

本当に、毎日がずうつと続けばいいと、思ってたんだ。

青子が、笑ってくれるといいなって………。

それから、僕は毎日放課後、それがあたりまえのように、屋上に続く階段で逢っていた。中也、ピンクフロイド、最近のバラエティ番組、映画、とにかく、いろんなことを話した。トランプで手品もしたし、ゲームもした。

お互いに、いろんなことを知った。ずいぶん親しくなった。

なのに、放課後だけだった。

学校外では、もちろん、校内でも、廊下とかであっても、挨拶すら

しなかった。お互いにそれが自然だった。屋上に続く階段だけが、僕らの場所だった。

高校二年になった春。クラスがえの発表掲示板を見た。

僕は……一組だ。

ざっと、他の人の名前を見た。2、3人しか知ってる人の名前がなかった。でも、この学校だ、すぐに、友達なんかできるさ。

そうして、教室に向かった。僕の席は、前から4番目。廊下から2列目。

席についた瞬間。風が吹いたような気がした。

隣りに、青子がいた。

「あれ……」

思わず声が出てしまった。

青子が振り向いた。

「碧……」

「え……」

ガラツと音がして、担任が入ってきた。僕と青子の会話は止まった。

青子といっしょのクラスだ。

……。

嬉しい。素直にそう思った。

この学校に来て、青子に出会えて、同じクラスになれて、本当に嬉しい。

生きていてよかった。

死ななくて本当によかった。

ああ、毎日が続きますように。

初めて思えた。本当に心からの嬉しさがあった。あの悲しい事実以

来……。

どうして青子に関することだけで、こんなにも嬉しい気持ちが、幸せな気持ち、湧いてくるんだろう。これを言葉にできたら、どんなに素敵な言葉になるんだろう。この世のなかのすべての詩を集めても、すべての歌を歌っても、間に合わないくらいだと思う。幸せなんて言葉じゃ、ずっとずっと足りないくらいなんだ。もどかしい。どうして僕は、言葉でないと何も表せないのだろう。この気持ちを、この感じを青子に伝える術が言葉しかないのだ。

僕はまだ習っていない言葉なのかな？僕はまだ知らない言葉なのかな？それとも、この気持ちは、世界に存在しない、僕だけのものなのかな。

「びっくりした。」

始業式の終わった後の放課後、僕はいつものように屋上に続く階段にいて生徒のいなくなった校舎でお昼御飯のパンを食べていた。そこに青子が出てきて、いきなり言った。

「本当に、びっくりした。」

「僕だって」

「なんかー……変な感じ。」

「いやだって？」

「ちがう。……。」

青子は隣にしゃがんで、こっちにむかってにっこり笑った。

「うれしいー！」

「ほくだって」

と、さっきと同じ口調でいった。

「ほんと？ほんとつぼくない。」

と、青子は口をとがらせた。本当だよ。さっきの考えを思い出した。なんてもどかしいんだろう。この気持ちを、この感覚を、この幸せ

を伝える言葉がわからない。伝える術がわからない。

「だから、今日ここにいるんじゃない。普通来ないよ、半日で学校が終わる日にさ。」

口は一生懸命今の気持ちを伝えようと必死だった。うまく伝わったかはわからない。

「いえる。」

青子の声は僕を救った。そして思った。言葉だけじゃない。そして、きつと青子に伝わっている、と思えた。それに、青子のことも、僕に伝わっていることを知っていたことを思い出した。むしろ、そういったものが、僕らにはずっとずっと多かつたんじゃないかな。言葉ではない、何か。それを僕等は知っている。

ピアノ。

ピアノが聞こえた。

誰かが、シヨパンの別れの曲を弾いている。卒業式でもないのに、なんでまた？と思ったけど、とてもきれいだから、いっか。

屋上はきつと今日も晴れているだろう。

一面に光が満ちて、きれいな青の空が広がっているだろう。

それはここからは見えないけれど、そう思えた。

「青子、空が青くてよかつたよね？」

「うん。」

「青子」

「うん？」

「青子にあえて、本当によかつた。」

僕は、自分でもわからなかったけど、なぜか涙が頬をつたっていた。青子はゆっくり笑って、じっと見つめて、顔を近づけて、僕に、キスした。

そしてまた、青子はゆっくりと笑った。

「私も、碧にあえて本当によかつた。」

今日はなんだか変に明るい。
いつもの薄暗い屋上に続く階段なのに。
シヨパンの別れの曲が流れ続けている。

今日は僕の誕生日。今日は一七年間生きてきて最も幸せな誕生日だ。青子のためになら、なんでもしたいな。青子が僕のうれしさの、幸せのすべてだから。死んだ毎日を消しさる人だから。青子がいれば、なんだっていい。なんだってできる。僕が人間じゃなくなたっていい。どんな形だってもいい。青子と一緒にいられれば。青子が笑ってくれることは、僕のすべてなんだよ。だから、僕はなんだってできる。そうだ、なんだってできる。

次の日、青子と一緒に授業をうけて、青子と一緒に御飯を食べた。つまり、“一緒に教室で”。教室でも、ろくに話さない。

僕らはその場所だけで、僕らとなり、会話する。
桜餅や柏餅、クレープ、アイスクリームやメロンパンいろんなものを食べて、いろんなことを話した。それはきつと言葉だけじゃなかった。

「青子さん」

「はい。」

「何読んでるの？また中也？」

「ふふ・・・教えない。」

「なんだよ。」

あまりにも本に夢中で、青子に話しかけるのを遠慮しようかと思つた。でも、今日は、することがある。

「青子さん。」

「はい。」

「これ、あげる。」

と小さな鍵を渡した。

「何これ？」

「手品の一つ。」

「え！新しい手品？」と言って、青子は本を閉じて、床の上においた。

「ううん。まだ、練習中。でも、そのうちできるから、それまで持っていてよ。」

「何それ。」青子は怪訝そうな顔をしていた。

「なくさないですよ。それ、僕の心の鍵なんだから。」と笑いながら言った。

「何それ。」さっきと同じ言葉を、今度は青子も笑いながら言った。

「わかったよ。大切に、肌身離さず持つてるよ。碧の心が漏れちゃったらやだもん。」

「よろしい。」

それから、その鍵は青子のペンダントになった。青子は文字通り肌身離さず、僕の「心の鍵」を持っていた。だけど、その鍵を使う手品なんて、本当はなかった。ううん。それが解けるときは来るよ。でも、手品とは、少し違うと思う。どういう形にしても。でも、それは青子の手にあるべきものなんだ。

2カ月ほどすごし、もう、夏がこようとしていた。

今日はよく晴れた7月の最初の日。

今日は早くに学校に来た。昨日、なぜだか眠れなかった。いや、いつもよく眠れないのだけど、昨日はいつもにまして眠れなかった。

いつもは数時間ほど寝られるのに、昨夜は時々とうとうとしたくらいだった。夜は闇が襲ってくるからだ。どんなに忘れたふりを装っても、どんなになんでもないフリがうまくできても、ひとりになれば、涙が溢れるように、夜の闇は、僕を恐怖に陥れる。「お前は嘘のもだよ。」という声が聞こえる。「生きていても意味なんてないよ。」

と冷たい声が聞こえてくる。「憎い」という言葉が頭を駆け巡る。

「死ねよ。」という声が聞こえる。怖くて、怖くて、ヘッドフォン

で音楽を聴いても、その声は止まらなくて、いつも眠れないんだ。でもね、青子に出会ってからは、少し違うんだ。怖くなったら、どこかでトンビの鳴き声みたいなのが聞こえるの。それで僕は思い出す。あの鳥が飛んでいるようなきれいな足音。そして、僕はキミと出会う。何度だって。そうしていると、いつのまにか数時間眠れていたんだ。

だけど、昨日は違った。昨日は青子の足音が聞こえてから、青子が消えたら？と思ってしまった。

ああおこが、きえたら？

それは、とてつもなく恐ろしかった。この世界にとって大きな痛手になるような気がした。地球の命がなくなるんじゃないかと思っただって、青子は世界の明るさのすべてだから。

青子をずっと笑わせてあげて。

青子をずっと守ってあげて。

青子が……ずっと、ずうっと、笑っていれば、世界は光に満ちているから。

青子が笑っていれば、世界はずっと明るいんじゃないかな？
ずっと、平和なんじゃないかな？

ずっと………

そっだ。いつだっただろう？

あ。そう。木庭たちのいじめのときだった。

「おい、見るよ。」

「ぎゃはははは……!! やべえよ、これ、さすがに。」

「やべえけど、うけんだけど……!! そのうちやりかねなくなっかね?」

「最近多いしな！」

「金入らんなくなんじゃん。」

なんだ？

気がついたら眠っていたのか？

いや、殴られたんだった。

それで、意識なくなっただった。

あれ？

目を開けたのに何も見えない。

真っ白だ。

布？

「冥福をお祈りしますってか？」

「ぎやはははははは！」

「おい、目が覚めたみたいだぜ。」

「行こーぜ。」

「じゃあな！死人さん」

「ひでえ。ぎやはははははは！！！！」

「死ねよ。」

僕の死は、笑えるのか？

笑えるのかも知らない。

この世界の何よりも。

ああ、そうだ。

この世界を明るくするあの子に、一生笑ってもらえるように……。

僕は決心した。

そうだ。

死。

それは何も暗いだけじゃない。

そうだろ？

だって、それを知った今、僕の出生を知ってしまった時の死とは全く違い、生きるということ、そして死ぬということ、そして、なにより、「人」というものを、素晴らしく思っているのだから。

僕は夢みていたことがあって、それは本当にどうしようもなくバカみたいなことなんだけど……

それは、それは、本当の……父さんと母さんの子供になることだったの。

ごめんね、僕と同じ名前の碧さん。

ごめんね。

でも、ずっとずっとそう思ってた。

シンと静まった学校の朝。

光が満ちている。

青子、今日は暑いね。

もう夏だ。

空は真っ青。

青子の色だね。

メモを取り出して、走り書きをして、靴に詰め込んだ。種明かしだ。ペンを技術室から取り出して、ゆっくり歩いた。

窓の外は今日もきれいな空。青い空だ。

この屋上に続く階段は、僕の天国、楽園、そして、僕の場所。屋上へのドアはあかない。

だけど、窓は、割れる。

窓をふさぐベニヤ板をペンチではがした。

明るい光が飛び込んでくる。

世界はこんなにすばらしいのか。

窓をペンチでぶち壊した。

そこから屋上にでた。

かごからでた鳥の気分がわかった。

世界は美しいよ。

どんなことがあっても。

ねえ、そうだろ？

青子・・・・・・・・・・

さあ、笑って。ねえ、1回だけしか出来ない僕の道化。

きみの笑顔のためだけの道化。

笑って。

十七歳の僕の精いっぱい。死ぬって怖いと思ってた。

僕が家族のなかで異質なやつだと知っても、悲しくても、いじめられて本当につらくても、怖くて死ねなかったけど、今はね、とってもおだやかなんだよ。なんでだろうね。

僕は今死ぬことで、とってもし幸せを感じているんだ。

ねえ、青子。

僕は幸せです。

僕は幸せです。

ゆめと、あいと、何かを

探して生きることも忘れてた

でも目を閉じれば

ねえ、君の笑顔

たったそれだけが、

いや、

それこそが

僕の生きたしるし

碧の物語

完

青子の物語 プロローグ&第八話：碧の死

青子の物語

ゆめとあいともうひとつ何か

ずっと探してきたけれど、

目を閉じれば

ねえ、

あなたの笑顔

ゆめでもあいでもなく

あなたの笑顔

誰？

誰？

泣かないで、こっちにおいで。

ひとりでそんなところに立っていないで。

また、あの夢だ。

真っ白なもやの中で、誰かが泣いているの。

わたし、手を伸ばしたいのに、

その前に、消えてしまうの。

第9話：碧の死

死んだ？

碧が？死んだ？

.....。

いやだ。

うそだ。

死ぬはずない。

嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。

やめて。

死なないで。

明日も会えるでしょ？

あの場所で。

約束なんてしてないけど。

だって、

わかってるじゃん。

私も、

碧も。

うそだ。

この世の何もかもを憎んでやる。

こんなところにはもう、うんざりだ。

私も、もうすぐ逝くから。

待っていて。

だって、あなたしか、私にはなかったのに。

たった一つのこの世につなぐロープ、

生きる意味

生きるすべてだった。

どこにも行かないって約束。

それを、なくしてしまつた今、
ここには、なんの意味もない。
ただの、ハコ。

あなたがいないなら、すべてがないの。
わかつて。

命に代えても、あなたを守りたいとすら思った。
すべてがあなたにあった。

だから、生きられた。

我慢できた。

世界を素晴らしく思えた。

なのに、もう、この世には意味がない。

なんで、碧がいないのに、この世界は続いているの？

意味がわからない。

誰も気づかないの？

こんなに世界が暗くなったのに？

どうなってるの。

もういや。

たすけて

ここはどこなの？

みんないなくなれ！

いいえ。わたしがいなくなれ。

あなたに会えるなら、なんだったとする。

どうすればいい？

わたしが死んだらあなたに会える？

もし、死後の世界なんてなかったら？会えなかったら？

碧、もう一度生まれ変わる？

あなたに会える？

どこにいるの？

夢？

これは夢？

何度泣いても、何度眠りから覚めても、碧、あなたに会えない。

七月の快晴、空は雲ひとつない真っ青。

わたしの色。

碧は死んだ。

この日はわたしの命日だ。

7月1日。

めずらしく穏やかな気持ちで目が覚めた。

なのに私は泣いていた。

目が覚めたら泣いていた。

こういうこと、よく本とか映画でみたけど、実際あるとは思わなかった。

寝ていたのに泣くなんておかしいと思った。
なんで泣いてしまったんだろう。

今日も碧と同じ教室で会えるのに。
変なの。

早く学校に行きたい。

私の世界を明るく照らす、そんな人、碧は。

全くこの世の中は美しい。

なんてきれいなんだろう。

空は。

“空が青くてよかった。”

いつだったか碧が言った。

私の色。

この世界をいとおしいと思えた。

碧に会えたこと。

本当に素晴らしかった。

この世の中にこんな人がいるんだ、と思った。

くだらなかつた世の中に色ができたの。

毎日笑えた。

素敵な毎日。

今日も続く。

きつとずうつと……。

「いつてきまあす。」

重い鉄のドアをあけた。団地のコンクリートでできた階段はまだ少し湿気っぽかった。でも、外は今日も快晴。

雲ひとつない、私の色。

夏服が好きだ。

碧と出会ってから好きなものがなぜか増えていく。

白いセーラーは、太陽の光を受けるとますます白くなる。

紺色のスカーフが風になびくと、こっちまで軽くなった気持ちが出てくる。

暑いのに、すがすがしい気持ちになれる。そんなものだ、夏服。

雀がさえずつて、いかにも朝らしい。木の葉はもう、木漏れ日を作り出している。きれいきれい。

私は風景画が好き。

だけど、どんなにきれいな風景画も、どんなに写真みたいな風景画も、実物にはかなわない。あたりまえだ。生きているから。

こんなに“生きている”ということ、大きく大切なことと思えるようになったのも、かなりの変化だ。碧は私にいろんなものを与えてくれているみたい。

学校の校門に数台の車が見える。

よく見ると、人だかりができています。

テレビカメラもあるみたい。

なにかあったのだろうか？

“数台の車”のなかに、パトカーと救急車があるのに気がついたのはだいぶ学校に近付いてからだった。

交通事故？

たくさんの報道者からいつぺんに情報が私の耳に入ってきた。

「こちらが、今朝、少年が自殺した高校の正面玄関です。詳しいことはまだ分かっていません。」

「自殺した生徒は、十七歳で、いじめがあったのでは、とのうわさも入っています。しかしまだ詳しいことは分かっていません。わかり次第、お伝えします。」

.....

自殺？

この学校で？

ありえない。

こんなバカみたいない子ちゃん学校で。

みんな幸せなくせに。

誰が.....？

碧？

なんで？

なんで、いま、碧が浮かんだんだろう。

ありえないよ。変なの。

ばかだな。

そう考えたのに胸がざわざわしてならない。
どうして？

「碧・・・・・・・・・・」

早く会いたい。

報道者や野次馬を押しつけて、学校に入った。

急いで、走って教室に向かった。

みんな席についてシンとしている。

碧、碧・・・・・・・・・・。

周りをみまわした。

・・・・・・・・。

見回すまでもない。

碧は私の隣の席だ。

となりにには誰の影もなかった。

碧・・・・・・・・・・。

心臓がばくばくいていた。

ガラッ

と、扉が開いて、担任が入ってきた。顔が真っ青だ。担任の、口が、
開く。

やめて。

「みなさん、心を落ち着けて、聞いてください。」
教室は一瞬ザワツツとなり、すぐにシンとなった。

「今朝、このクラスの……。」
先生は息をのんで、泣くのをこらえているようだった。

やめて。言わないで。泣いていいから、この先を言わないで。

「桜井……碧くんが、亡くなりました。」

言わないでって言ったのに。

立ち上がって、教室を出た。
走った。

行く場所は決まっている。

屋上へ続く階段だ。

待っていて。

新しい中也の詩を覚えたの。

碧にきかせたくて。

まるであなたのような詩。

屋上へ続く階段には黄色いテープが付けられて、入れなかった。
でもいつもより光に満ちていた。
私にはわかった。

ああ、碧は、光に出れたのね。

わすれない。
あなた以外の人間なんて、信じない。

第九話：青子の死

1692

受かつてる。

……。あれ？こんなものなの？

もつところ、そうあれでしょ、やったーみたいなこと、感じるんだよね？？高校合格、長い道のり、頑張った自分が主人公。

あら？なんも感じない。

バカみたいだわ。

周りの歓喜の音がうるさい。

あ。一人、じつと見上げている男の子がいる。

あの人も絶望でもしているのかな？

そうだよ、現実なんてこんなもんでしょ。

つまんないの。

みんなと同じことを同じように繰り返す。

それらしいパターンがもう出来上がっちゃって、みんなそれに忠実に生きていく。当たり前のこと。誰もこれに変な気持ちなんて持たないわ。

持っていたとしても、大丈夫。みんなはうまく忘れてしまえる。

わたしもそれができるようになるわけ？

くだらない。

【そうあるだろう】と、決められたような、感情や反応、それらを先に知っている。それを自分も期待する。思ったように感情が動かない。

そして違和感を覚えるんだ。わたしはまさに今それを体感したんだわ。

そうして、そんなことも気にせずに、感情と反応をコピーして、そんな中でも毎日他人より少しだけいい暮らしをするために、あくせ

くあくせく働いて、一生“先の暮らしのため”と行って働きつめて、あとは死を待つくらいに年になってから、あれなんだっけ？したいことって？みたいな感じに思っ、いいのですよ、わたしはこんな幸せなんだから。とかなんとかこじつけて、遺産をのこす。そんな感じ？うまい人の人生って。そんなことするなら、今すぐに自分の意思でこれを断ち切ってしまったほうがいいんじゃないかしら？わたしが間違ってるのかな？生きるのってバカみたい。

テレビだか何だか、この世は分からなくなっている。テレビが現実
に忠実なのか、現実がテレビに忠実なのかどっちなんだ？
とにかくもう、わけがわからない。
うんざりしちゃってつまらない。
こんなことをくりかえしたくない。
わたしがバカなのかな？？？
どうしたら生きていける？？？
こんな事ばかりを最近は考えていて、わたしは自分がいつか自分で
命を消してしまうんじゃないかって不安になるんだ。

「ただいま」

重い鉄のドア。

団地の三階ここがわたしの家。

「おかえり。」

『どうだった？』ってほんとは聞きたいんでしょ？？お母さん。

「受かってたよ。」

さらっと言ってやった。

「よかったね！！」

お母さんはすぐにそう言った。

本当によるこんでんのかな？わかったもんじゃない。

感情は皆にあるの？

わたしの中は、ドラマやマンガと現実でこんなに違うよ！と、言いたかったけど、やめた。

『行きたくても、その学校に行けない子もたくさんいるんだからね。』

と、返されるとわかっていたからだ。

なんて、つまらない世界。

その日、わたしたち家族は外食しにいった。わたしが頼んだのは前から食べてみたいと思っていたふぐのしゃぶしゃぶ。

ところが、これも大したことなくて、食べなきゃ良かったとすら思った。

憧れのままとっておけばよかった。

今日は厄日だ。

人生のいろんなことに対してわたしは期待をしすぎている。

いろんな嘘があちこちに広がって、さもそれが正しいことのようなふりをして、みんなはうまく騙されて、生きていくんだ。

わたしもいつしよに騙してよ。

なんで、わたしにだけ、それをかけないの？

信じてはいけないよ。

ここに生きるものとして。

人を、モノを、すべてを信じてはいけないよ。

夢は描いて、夢みるもの。

憧れのままに。

自分でかなえられること、一人でも、かなえられることだけを信じて。

自分くらいなら、信じてもいいでしょう。

そう、わかっているのに、いくらか時がたつと、また同じように騙

される。自分にうんざり。

夢をみて生きていたかったの。ずうつと暖かい中で。

でも、そんなの、赦されないんだって、最近もう、いいかげん、気づいた。

ヒットソングも、ミリオン本も、高視聴率ドラマもみんなうそ。

現実にならないから、流行るの。

どうして、こんな簡単なこと、気づかなかったんだろう。

わたしのシナリオ。

ドラマのように、死んでしまおう。

ゆっくり眠るように死のう。

手首に、新しい刃のカミソリをあてる。

上側の見えている血管では死なないと、中学の先生が言ってたっけ。

奥にいれなきや、でも、一瞬痛いだけ、でしょう？

それを水につけて、だんだんと意識が薄れていくよね？

わたしの台本は決まった。

決行日は、明日。

高校なんか行きたくもない。

また同じことを繰り返す。そんなの、うんざり。

「助けて」なんて、

誰にいうの？

明日はみんないない。

お父さんは仕事。

お母さんは近所の集まり、

お兄ちゃんは、学校。

だから、できるよね。

そう。わたしはわたしを明日殺すのよ。

明日はわたしの命日。

明日はみんないない。
この世の中はなくなるの。
涙なんてでないわ。

笑ってしまえ。

大切なものはなにもない。

うつすらと見える私の手首の静脈。ひやりとした剃刀の刃。スツと滑らせると、少しの痛さに、真っ赤な液体が、白い皮膚の上をつたった。私は自分の口角が上がったような気がした。でも、そんなこと気にならなかつた。もう一度、剃刀を持ち直し、角度を変えて、今度は力を込めて、奥の奥まで行くように。剃刀を奥まで進めて、えぐるようにした。もう、痛いというより、吐き気がした。その吐き気を代理するかのように、私の手首からは血液があふれた。それを用意した水をはったバケツの中に入れた。バケツの水に筋のように赤い糸がふわりふわりと漂ったかと思っただら、あっという間にバケツの水は赤に変わった。

三月一五日。

私は死ぬはずだった。

第十話：まわり

『青子さん。聞こえますか？青子さん??？』

『おかしいですね。そろそろ目を覚まして、いいころなんです。』

『。。。。経過は?』

『特に異常は見られません。』

『まあ、致死量寸前までの血液をなくした後ですので、なかなか、身体も、本調子にはもどれないのかもしれないかもしれません。術後の経過には個人差もありますので。ゆっくりと見守ってあげてください。。。。』

『

なあに。。。。?

ぼんやりと会話が聞こえる。。。

わたし、ドラマを見てる途中で寝ちゃってたのかな??

「ん。。。。」

「先生!!!!」

「青子!!!!」

目に、ライトがあたる。

眩しい。

なんなの?????

「高橋さん。わかりますか。」

「あ。。。。」

声が出ない。

「あ、まだ、しゃべらないで下さい。呼吸を助ける管が入っているので。話していることが、理解できたら、瞬きを一回してくれるかな?」

ゆっくり瞬きをした。

「あなたは、高橋青子さんですよね？」
再び瞬きをした。

「今いるところは、病院です。」
また瞬きをする。

「いま、青子さんの、身体は、一時、大量の血液を失ってしまったために、正常に機能するのが難しくなっています。しかし、これから、徐々に元通りになって、元気になれますから、
ゆっくりとまぶたを閉じた。」

「頑張りましょうね。」
瞬きはしたくなかった。

ああ。そうか、わたし、死ねなかったんだわ。どこにも、いけないんじゃないかしら。死ぬことすら、赦されなかった。
ぶざまだ。

でも、一回だけ、瞬きを試みせた。

病院？本当だ、まっしろ。

ぼんやりとした視界は真っ白だった。病院の特有のこの空気感も。
わかる。生きてしまっている。夢でも、天国でも、地獄ですらない。
わたしは生きてしまっている。

「青子、お母さんよ。わかる？大丈夫よ。お母さんがついてる。お父さんだって、お兄ちゃんだって、みんな青子の味方よ。」
???????

え？何言ってるの？お母さん？

「なんにも、心配しなくていいから。お母さん達にまかせてね。大丈夫。お母さん、強いんだから！！！！」
と、ニッコリして見せている。

あ。そうか、わたしが自殺したから……。

正確には、自殺未遂をしたから、お母さん達、わたしに何か苦しいことや悩みがあるんじゃないかと思ってるんだわ。そう、たとえばいじめとか？

「いじ……」とお母さんの唇が言おうとした。

するとお父さんが、お母さんの肩をぐつとにぎった。

お母さんはお父さんの気持ちを察して口をつぐんだ。

きつと、「いじめがあったの？」とお母さんは聞きたかったのだろう。しかし、お父さんは、そんなことを聞くのはまだ、早い、と思っただろう。

でも、どっちも的はずれだ。

わたしは、いじめられてもいないし、いま、そんなことを聞かれても、また傷つくとか、自殺したくなるとか、そんなことはない。

だって、わたしが死にたかったのは、明確な理由なんてないもの。

して言うなら、この世の中、社会すべてがいやだったからだもの。それ以外に理由なんかはない。すべてが嫌だったんだ。

でも、そんなこと、考えてもいないんでしょう？

だって、そんなこと、テレビでも、新聞でも、週刊誌でも、やってないもんね？あのおね、いま、もう一度自殺したいとは思わないよ。

だって、わたし、死ぬことも赦されなかったんだから。もう、あきらめるよ。

うふふ。大丈夫、もう、自殺なんかしないから。そのかわり、わたし、別にもう、この世の中に未練もない。だから、死んだように生きるわ。気にしないで、大丈夫、うまくやるわ。

ね？お母さん、お父さん。

と、言っただけだった。

けど、忌まわしくも、わたしを生へと結びつける管のせいで、一言も発せられなかった。こんなもんだ、とまた思った。

わたしの、意志など関係ない。人は生きることが最善で一番の目的。そう、疑いもしない。本当のことなのかと、疑問にも思わない。絶

対の答え。

それから、わたしは二ヶ月くらい入院して、一ヶ月自宅で安静にすることになった。入院中、お母さんは毎日やってきた。いいお母さんのように、かいがいしく、世話をして、看護婦さんや、同室の患者さんとも親しくなっているようだった。

お母さん、私のそばにこないで。前からそんなに、気にも留めてなかったくせに、どうして、今になって、そんなにそばにくるの？ほっておいて。平気だから。もう、自殺なんかしない。大丈夫だから、ほっておいて。そう、言いたかった。

でも、わかっている。そんなことをしたら、お母さんは自分のしている“正しいこと”を感謝や評価しない娘に悲しみ、怒り、そうして泣くんだ。だから、言わない。一度「お母さん、もう、だいぶ体調も良くなったし、そんなに来なくてもいいよ。お母さんだって、毎日来るのは大変でしょ？そりゃあ、お母さんが来てくれるのはうれしいけど、でも、いつまでも私のことばかりじゃ、お母さんの体もたなくなっちゃうよ。」と、やっぱり評価しつつ、拒もうとしたけど、逆効果だった。お母さんは「いいのいいの。」と行って、うれしそうに、それから毎日通い続けた。

お父さんもお兄ちゃんも週末にやってきて、本や漫画、ゲームなどを持ってきて、しかもそれは、こころがあったかくなるようないいお話ばかりだった。

うんざり。私、こんな話好きじゃないの知ってるよね？

本なんか、ミステリー以外読んだことないし、漫画はグロ系のほうが好き。どろどろの恋愛とかだって好き。知ってるよね？少なくともお兄ちゃんは。

どうかしちやっただの?????
わかっている。

私のせい。私が自殺なんかしたから、どうかしちやっただと思われて

んのね？

そうそう。なら、私にも役割が待っている。

ちゃんと、「もう、自殺なんかしない。私のことこんなに見て大切に思ってくれる人たちがいるんだから！」って、態度にしめすことつまり、読みたくもない本を読んで、感動したふりをして、それを、的確に言葉にしてみせる。

自殺の代償はおっきいな。

わかってたはずなのに。
いらいらする。

もう、こつちにこないで。話かけないでよ！そばによらないで！！
バカみたいなのが、次から次に降りかかってくる。

誰もそれがおかしなことだとは、思わない。

私は幸せな子だ、と。

こうしていると、自分と他人の間というものを、実感する。

決して他人は自分ではないという、当たり前前的事実。

なのに、初めて感じたような気分だった。

自分と他人の圧倒的な違いが見えるようだわ。

それはいつでも明確なはずなのに、なぜかいつも忘れてしまっている。

「他人は自分ではない。」

だから？

意思疎通？

何それ。

ああ、うまくやっていくんだっけ???

自分の意思を示すこと。

大事なこと。

私はこれが苦手なんだ。

何も言いたくない。

私は私だけが知っていればいい。

こんなにも“まわり”を意識したことが、これまでであったかな？？
うまくムシして、私もだましてきたのに……

ああ、一変してしまったんだ。

私の自殺のせいだ。

こんなにも、もろい自分と他人の間のもの。

これを世の中の人は絆と呼んで、贅美する。

でも、ほら、見て？

私は誰ともつながっていなかった。

こんなことで、悲しむとも思う？

むしろ、おかしくて笑っちゃうわ。

だから自殺なんかしようとしたんだのに……

“まわり”はそんなことすら、わからないのよ。

自分は他人とは違う。

それだけのことが、どれだけ人の人生を難しくさせて、混乱させて
いるんだろう。

そして、それに気付いている人と、気付いてない人とで、どれだけ
不平等になるか。

わたし、時々思うの。

周りの人の気持ちを読み取れてしまうたびに、自分を憎いと思うの。
わかってしまっただけから、無視はできない。

そんなことをしては、本当にひどい人になってしまう。
それとも、私は善人ぶっているのかな？

気づかなければ、他の人のように気付かないでいらればどんなにいいんだろう。

それとも、みんな分からないふりをしているのかな？
私もその術を学んで身につけるべきなのかもしれない。

でもまあ、今に始まったことじゃない。

平等なんて、どこにも存在しない、きれいな理想だ。

そう、そんな理想でできている、素敵な世界なんだって。

この世の中は……。

でも、私、もう、まわりを信じられない。

私のことなんて、わかってなかった。

わかってたはずなのに……。

どうしてこんなに、悲しい気持ちになるの????

私と他人。

私とまわり。

それがこんなにも、遠いんだ。

人を信じるのは難しい。

そんな言葉が頭に残った。

第十一話：転校生2

それから、お母さんの言うとおりに家で休養して、読みたくもない本を読んだり、見たくもない写真をみたりして一か月過ごした。

だから、高校に登校できたのは、6月の中旬からだった。

お母さんは、まだ、もう少しゆっくりと休ませたかったみたいだけれど、身体はもう完全に元に戻っていたし、休む理由なんかない。どうせ、何も無いのだから。

学校へでも、どこへでも行って、なんだってしてやる。

私はどうやら“転校生”ということになっていた。

持病があるってわけでもないし、ただ病気では、他にどのような影響がでるか分からない。といらぬお世話がいろいろところで働いて、私をいたわるかのように“まわり”の大人たちがそう決めたらしかった。

実際私はこの地の人間ではなかったから、転校生として扱われるほうが、楽でもあった。

私はこの地に、中学になった年に引越してきた。

まだ3年しか住んでいないため、地理や習慣なんかわからないことがあったから、“まわり”のみんなの目にもリアルに“転校生”に映っているようだった。

ばからしい。と思いつつも私は演じ続けた。

毎週学校や親がすすめたカウンセリングも受けてやった。

カウンセラーが答えてほしそうな答えをいつも答えた。

にっこり笑っていれば、誰にもなにも言われない。

毎日楽しく生きているふりをした。

そうしたら、ある『お友達』に「青子ちゃんは毎日楽しそうではないね。私もそうになりたい。」と言われた。
どう？私はうまくやれてる?????

笑っちゃうね。

私は自分が、他人の心を汲み取り、そしてそれに応えようとするとは反対に、
周りが私の心を一つも汲み取ることもなく、気付くこともしないことにいらつくことが多い。

でも、それもすべて私のせいなのだ。

私は自分を分かってもらおうとしていない。

うまくだまそうとしか思っていない。

くみ取られないようにしている。

だからこれは私の正解なのだ。

なのにどうして、私はいらつくのだろう。

どうしても死にたくなると、私は屋上に続く階段や歩道橋や橋の上に行く癖ができていた。

決してそこから飛び降りようという気は起きなかった。

ただ、下をみて、そこを動く人たちを見て、私はトンビになっていくんだ。

ただそれだけのこと。

それが私を救うの。

なぜだかなんて、考えない。

ある日、いつものように私は歩道橋にいた。
煙たいような、埃っぽいような空気が漂うなかだった。
ここから見える人間は、なんて恐ろしく早く動いているんだろう。
みんなどこに向かっているんだろう。
そんな人々の上をゆっくりゆっくり旋回するんだ。
夢みているような心地いい気持ちになってくる。

「何してんの？」

びっくりした。

いきなり声が聞こえた。

いつもコレをしているときは周りの雑踏もひそひそ声も聞こえなかったのに。

“ どうして？” って思った。

これは、運命だったのかな？

そんなこと、関係ないね。

どっちにしろ、私たちは出会った。

それだけが重要なことだ。

ゆっくり振り返ると、そこに、碧がいたんだ。

「何してると思う？」

と、にっこり答えた。

私の口が勝手に動いた。

そこに立っている男の子は線の薄い人だった。

肌が白くて、優しそうな目。

なのに、誰にも言えないほど、とてもとても、悲しそうな空気だったんだ。

色で言うなら、ものすごく薄いブルー？

その男の子の薄い唇がゆっくり動いて言葉を作った。

「わかんない。」

驚くほど素直に“ わかんない” を口にしたその男の子にまたびっくり

りした。

私は、“わからない”といったことがない。

いつも思っているのに、相手が期待しているだろう答えは知っていたから、いつもそれを答えた。

「わかんないの？」

とちよつと気取って言ってやった。

この人に、この素直な人になら教えてもいいかな。と思った。

「しょうがないな、ここに立ってみて。」

男の子は小さな声で驚きの声をあげたようだった。

私は自然になつこり笑っていた。

嘘の笑いではなくて……。

「ね。飛んでるみたいでしょ？気持ちいいでしょ？死にたくなつたらここに来るの。私、生まれ変わったら絶対にトンビになるから。」
と男の子に向かって言った。

男の子の薄い唇がまた開く。

「トンビ？普通の鳥じゃダメなの？なんでトンビ？」

また、素直に質問してきた。

「トンビじゃなきゃだめ。ああいう風に空を飛ぶの。」

そう言つて、私は歩道橋の下のほうを向いて、両手を広げて髪を持ち上げた。

気持ちいい。いつも飛んでいて気持ちいい私は、地に足をつけてこの男の子にこのことを話したことを心地よく思っている。なぜ？

しばらく沈黙が続いて、それでも私も男の子もそこにいた。

「名前は？」

私の声が沈黙をやぶった。

「アオ」

とぶつきらばうに男の子が答える。

「アオ？」

私は驚いた。私と同じだ。

これは運命だと思った。

運命でなくてもいい。

私の運命なら、私が決定できるに違いない。

私の運命は碧そのものだから。

「私と同じ名前ね。私、青子っていうの。」

「青空のアオ？」

男の子が悲しそうに聞く。

「そつだよ。きみは違つなの？」

「違つ。碧玉のアオ。」

男の子の“違つ”はまるで自分を否定するかのように強く強く聞こえた。

「じゃあ、みどりのアオだね。」

そう私が言つと、碧はうつすらとだけ、笑つた。

その後、碧は「じゃあ」とだけ言つて、街に消えていった。

また会えるかな？

そんなことを思つた。

他人なんて興味ないのに、あの“碧”にもう一度会いたいと思つた。なぜ？

私はひとりで死んでいても同じような生活をしようと思つていた。

人に期待をするのはもうやめたはずだつた。

碧は別？

数日後、私の願いが叶つた。

私はいよいよ運命だと思つた。だって、私の願いが叶つことなんてないんだもの。

それは、屋上に続く階段に行こうとした昼休みだった。
私はよくそこへ行った。どうしてか？そんなのに理由なんてない。
ただ単にそこが落ち着く場所だったからだ。ひとりでもばれな
いし、居心地がいい。

階段を上っていく。

誰かがいる。

またなにかカップルでもいるのかな？

面倒くさいな。カップルなんて何のためにいるの？

はあ……

それでも私の足は先に進んでいた。どうせ私の足音が聞こえればカ
ップルなんておのずといなくなるからだ。

あ。

私の思考は一度停止した。こんなにいつもいつも考えているばかり
の私の頭は自らが予想していなかった事態には無力らしい。

そこにいた“誰か”はあの碧だったのだ。

私は焦った。「会いたい」と思っていた。それは事実だ。だけれど
も私がいつも願うと、現実には反対に動くのだったから、願いがこ
も早く実現するとどうしたらいいのか、わからなかった。
どうしよう。

そんな状態でも私の足は先に進んでいく。

きゅつきゅつきゅ……

しらじらしくも私は驚いた口調で言った。

「あれ？」

「アオ君じゃない？」

“じゃない？”なんて嘘だ。本当はしっかりと覚えている。音だけじゃなくて“碧”っていう字体すらも。あなたのことをしっかりと覚えていたのよ。

「青子……さん？」

“碧”が私のことを見てそう言った。覚えていてくれた、という嬉しさと、呼ばれたことのない“さん”付けがむずがゆく感じて、笑って

「あはは、そうそう、“青子さん”だよー。」
と口が勝手に話した。

「あーあ……ここ、私だけの秘密の場所だと思ってたのにな！君もよく来てたの？」

これは本当だ。私はいつもここに来ていた。

なぜいままで逢わなかったのだろう。もしかしてもう、逢ってたのかな？？？

「僕だつてこんなトコくるの僕だけだと思つてた。」

頭でごちゃごちゃ考えているうちに碧が起き上がってそう言った。

「そう。私、入学してから結構すぐ、しかも結構きてたよ？」

反抗心がなぜか芽生えて少し威張り気味で言つてやった。

本当は“転校してからすぐ”なのに“入学してから結構すぐ”と言つてしまった。

「僕も。」

ぷっ。碧まで威張り口調だから、おかしい。

「あはは……なんの比べあいつこなの！！？あはは……でも、君ならいいかな。ね。」
と、碧を覗き込んだ。

すると碧がうつすらと「うん」って答えるみたいに笑ってた。

「でも、あれだね、二人ともよく来てたのに、今まで会わなかったなんて、不思議だね。」

私はまたうれしくて口が動く。

「ああ、僕、透明になれるからさ。」
と、碧はにやっとした。

「なにそれ！！あははは・・・」

碧は思ったより冗談をいう。

私はその一つ一つが面白くてたくさん笑った。

こんなに笑うのは久しぶりなんだろう。

だって、もうずっと笑ってなかった。

死にたかったのに死ぬことすらできなくて、自嘲する笑いばかりがこみ上げていた。テレビをみて笑っても、それはどこか乾いた笑いで、私はいつも何か考えたりしていないとただもう、泣きたくなっていた。死にきれない自分が、今も続く世の中が、惨めで、苦しくて・・・

なのに碧がくれる笑いのひとつひとつが私をいつもの私じゃない私に変えた。そして、私はよく笑った。

碧がしてくれることがすべてうれしくて笑った。

手品も冗談も話も・・・すべてがうれしかった。不思議だった。

私はこんなにも笑うんだと不思議だった。そして世の中にはこんな人もいるんだと碧のことを思った。碧がいたらずっとずっとうれし
いんだろうな。そう思う。世界が色を持ち始めたころだった。

碧がピンクフロイドの曲を聞かせてくれた時、悲しく訴えるようなその曲に私は泣いた。それを最も好きだと言ってうつすらとまたあの寂しい笑顔で私に聞かせる碧が好きだ。私は悲しいというよりな
んとも言えない感情がのぼってきて泣いてしまったのだ。

私が中原中也の詩を見つけて読んでいた時、いつも考え込んでいたことを質問したら碧が答えてくれた答えが、私がなかなか言い表せないけど思っていたことにぴったりとそっていて嬉しかった。

碧が「人間失格」を読んでいた時、私は「途中で挫折した」と言った。それはね、怖かったからなの。自分にそっくりすぎて怖かったから、読めなかったの。

それを碧が読んでいて、私が隣で中原中也の詩集を読む。そんなことがね、すごくうれしくて、こそばゆかった。うれしくて、うれしくて、なぜだかお気に入りの詩を読んでその場から離れてしまった。私はずっと家にもいたくなくて、だけれども『友達』ともいたくなくて、「私」でいたいとき、いつ屋上に続く階段に行っても、碧もいるのがうれしかった。

どこかに行きたいとも思っていた私が、屋上へ続く階段へ行きたいと思いはじめたころだった。

碧と食べればクレープも肉まんも何もかも、すべてがおいしくてうれしかった。

碧とすることは手品でもただのトランプゲームでも楽しかった。

碧と話すならあの乾いた笑いを提供するテレビの話も面白くてうれしかった。

わかる？「碧がいる」っていうことがたったひとつのうれしさの始まり。

そうして私をこの世界とまたつなげてくれた。

もう一度人になろうと思った。

お母さんにも本当を見せようとさえ思った。

ばかみたいなテレビのように愛だか夢だかも本当にあると思えてき

た。

探そうかとさえ思えた。見つけようとすら思った。

それに気づいたのは、いつだったけ？

そうだ。あの時だ。

私と碧が同じクラスになったその日だ。

びつくりした。

こんなことがある？ いっしょにいたいと思う人と一緒にいられるなんて、こんなにうれしいことがあるかな？

それをいつもの場所で二人で驚いていた時だ。

ピアノ。

ピアノが聞こえた。

これ、聞いたことがある。なんだっけ。美しい曲なのに、曲調からは感じられないタイトルだった気がするけど思い出せない。なんだか悲しくなるタイトル・・・なんだっけ？

「青子、空が青くてよかったよね？」

いきなり碧が口を開いたのでびつくりした。

だけれど、なるべく自然に

「うん。」

と答えた。

「青子」

「うん？」

「青子にあえて、本当によかった。」

碧が今にも消えてしまいそうなほど優しく笑って言う。

消えないで。それは私のセリフだよ。

碧の頬に涙がたった。

私も泣きそうになった。

なんで？

どうしてなんだろうね。

でもきつと私たちはわかっている。

同じ気持ちなんだ。

だから泣いてしまう。

私はなんだか碧が急にいとおしくなって、碧に、ゆっくりと、近づいて、

キスをした。

そして言った精一杯の言葉がこれだった。

「私も、碧にあえて本当によかった。」

なぜ口づけたのか、自分でもわからない。

世界中の恋人たちを馬鹿にしていた私は、愛も恋もことごとく嫌っていた。

私は碧に恋をしていたのかな？

わからないよ。

なにもわかっていなかったのかな。

どうしてあのあと碧は死んでしまったの？

わからない。わからない。わからない。

私はやっぱり、この世界を生きてはいけけないのかもしれない。

碧・・・・・・・・

いっしょにいたかったの。

ただそれだけが願いで、ただそれだけが命だった。

ああ、今にして思えば、「私の願いの反対に動く」という私の法則は間違っていたいなかったのかも知れない。

私はたったひとつの願いとすべてを失った。

何もわからないでいたい。

第十二話：ひろみ2

私は泣いてばかりもいられなかった。家族はもちろん、クラスメイ
トでさえ、私と碧にどんな関係があったかなんて知らないのだから。
私がいっまでも悲しみ泣いていると“まわり”が変な目で見始める。
私だけが見られる分には一向にかまわない。
だけれど、碧までもいっしょに変に見られては困る。
まして私が悲しむのを碧のせいにされたくない。

なんで？
どうして？

しだいに私の空虚なところには疑問が浮かんできた。
大切な碧が自殺した理由はなに？

まさか私と同じ理由なんかじゃないよね？
それはない。
だってわかるもの。

碧はそんな理由で死んだりしない。
「人間失格」をしっかり読める人だから。

じゃあ、どうして？

私、理由なんか知りたがる人間だったかな？
でも、でも、どうしても知らない私、私、世界を神様を恨んでし
まいそう。

だから、どうしても碧が死んでしまった理由を、それも自ら選んだ
理由を知りたい。

そうだ。それを知らない私には死ねない。

死ねない。

わたし、碧を死に連れて行ったものを決して許さない。見つけ出して引きずり出して引き裂いて消してやる。

そう決めてから、私の行動は早かった。まず、クラス内や学校内の碧の友人に声をかけてみようと思った。でも、それは私がずっと泣いていては変な目でみるにきまっているのと、同じことを引き出しかねないというのを即座に理解した。そしてその必要もないこともわかった。なぜなら、あれから校内は静かにだけどもかなりの興奮と不安をもつて碧の話題が繰り広げられていた。

当然自然に耳を澄ませばその話は私の耳にも入ってきた。

そうしてわかったのが碧とこの学校になんの問題もないってこと。

そして、碧と中学が同じで親しい人がこの高校にはいないこと。

このとき気づいたのだけれど、私と碧は同じ中学校だった。

どうしていままで気づかなかったのか不思議に思ったけど、私たちはそれほどお互い自身について話していなかったことに気づいて当たり前だと思った。

お互いを近くわかっていたけど、現実のかかわりをさもないようにしていた。

私たちの関係ってなんだっただろう。

そんなことも考えたけれど、そんなことよりも私の思考を行動を傾けなければならぬものがある。

だから、私は碧と中学が同じだった子に碧と親しかった人の名前を聞き出そうと思って、クラスが違う碧と同中学出身の子に会いにいった。

他人のクラスを覗くと、そこは同じ学校内なのにまるで異世界のようにも感じられる空間だった。私はドアの近くにいる人に尋ねた。

「佐久間くんっていますか？」

座っていたその男子生徒は日焼けした男の子に近づいて行って、こつちをみながらその子に話していた。坊主頭で日焼けしたその男の子が不思議そうにこつちを見ながら近づいてきた。

「なんですか。」

「あの、私1組の……」と言いかけた時、坊主頭の佐久間くんは『またか』とでも言いたそうな顔をした。

「桜井君のことなら知らないよ。俺だって面識少しあったくらいだし。一回も同じクラスになったことないし。」

まるでもう何回も碧のことについて尋ねられてうんざりみたいな口調だった。

「私も同じ中学だったんです。」

そういうと、佐久間くんは「えっ」って顔をした。

「あの、どうしても知りたいことがあるんです。碧と親しかった方のお名前教えてもらえませんか。」

「どうしても知りたいことってなんなわけ？自殺の背景とか？あんな、同じ中学だったならわざわざ俺に聞きにこなくてもわかんじゃないの？」

「いやな口調だった。」

正直こんなやつと口をききたくはなかった。でも、私には目的がある。

「あの、私、高橋青子といいます。あの……私、中学は同じだったんですけど、高校になってから碧くんと出会って、その……付き合ってたんです。」

自分でも言うのにためらった。

嘘をいくつもついてきたのに、こんなに言いにくいウソは初めてだった。

また佐久間くんの顔が変わった。

「それで……」

涙ぐむつもりもなかったのに、『碧』という名前を口に出しただけで涙が頬をつたった。

佐久間くんは急にやさしい顔つきになった。少しだけ、“佐久間くん”をくだらないと思ってしまった。

「もう少し人のいないところにいこう？」

と佐久間くんは教室を出て、生物実験準備室に入った。

そこはほこりっぽくて、変色したカーテンごしに日がさしていて、変なサンゴや生物の標本の古いものがあつた。

「ごめんね。あんな言い方して。桜井君について言ってくるやつが多くて。うんざりしてたんだ。で？」

そんな言い訳はいらない。

どうせこいつも同じだ。死んだ彼氏に泣いた彼女は特別。

愛を尊ぶ立派な人ってわけだ。

「あの・・・親しかつた人のお名前を教えてくださいんです。できたら連絡先なんかも・・・」

「あー・・・どうかなあ。俺、さっきもいったけど、本当にあんまり桜井君と接点なかったから。あ。でも、秀作と仲良かったって聞いたな。俺、秀作とは同じクラスだったから。秀作の番号でもいい？」

とケータイを出してきた。

なんでもいい。碧の理由を知れるなら。死に連れて行った憎いそれを引き裂けるなら。

そうして“秀作”とやらの電話番号を教えてください、帰ろうとしたとき

「高橋さん・・・もし、何か辛かったら、話いつでも聞くから。」

ありがとう。でも、そんなものいらないの。そう思ったけれど、一応「ありがとう。」と言って実験準備室を出た。

放課後さっそく“秀作”に電話をした。

「もし」

とだけ聞こえた。

「あの。」

「え？うわっ女？」

「私、桜井碧くんの……」

「ああ。佐久間から聞いた。彼女だっけ？」

彼女……そうだ。そう言ったっけ……。

「あいつ、彼女なんていたんだな。俺高校変わってからあんま会ってなかったからなー知らなかった。で、なに？」

なに？の口調がものすごくぶっきらぼうだった。

「碧くんが……あの……」

「なんで死んだか？そんなの、知らないよ。俺だって。」

冷たい人、なんて思わなかった。私だってこう答えたに違いない。世の中って案外とても冷たいの。

その方がみんな都合がいいから。

当り前のことだわ。変に甘いほうがどうかしてる。

「でも……」

ぶっきらぼうな秀作の口調が変わった。

「俺、覚えてる。一回だけあいつに相談されたんだ。一回。たった

一回。だからまさか、そんな大事になんかなってないと思うけど。

でも……だって……」

「あの……大丈夫ですか？」

「ごめん。詳しく話すよ。今度の日曜でもどう？駅前のマックで。」

「はい。」

そうして、会うことになった。

別に、会わなくてもいいのに、と私は実際思っていた。電話で済ませたかった。

というのも、顔を覚えられないのだ。

日曜、マックでポテトとシェイクという喉につっかかるような組み合わせを持って待っていたのが秀作だった。“ポテトとシェイク持ってるから！”ということを目印に指定したのは秀作自身だった。

「こんにちは」

「あーこんにちは。えっと、青子さんだっけ？」

「そうです。」

「あれ？君は食べないの？なんにも？買ってくれば？俺、待つてるからさ。」

「じゃあ・・・」とレジに向かった。別に食べたいものなんかいないけど、買わなきゃいけないみたいだし・・・。

そうして私はコーヒーを手に秀作のもとへいった。

「あんた、それだけ？ふうん。コーヒーって苦くね？俺、絶対一生コーヒーとか飲まないね！」

どうでもいい話が何分間続いた。

「あの。いいですか？聞いても？」

そう言くと、秀作の顔がこわばった。

そうしてシェイクを飲みにくそうに吸っていた。

「覚えてる。」って、電話で言っていましたよね？なんなんですか？」

シェイクをプレートの上に戻して秀作は下を向いたまま口を開いた。

「覚えてるなんていつたっけ？まあ、どうでもいいや。あのさ・・・

俺、3年の時にあいつから一回だけ相談されたことがあるんだ。た

った一回つきり。だからてつきり大丈夫で終わったんだろって思

ったんだよ。」

どうしてこんなに支離滅裂な感じなんだろう。

感情が先に口から洩れてしまってる感じだ。

「だから、アオのじ、自殺・・・に関係あるかどうかはわかんないけれど・・・」

自殺って単語を言いたくなさそうだった。

「いいんです。なんでもいいから。あなたが印象に残ってることだけでもいいからそれだけでいいですから話してください。」

秀作は顔をあげて、私を見て、またポテトに目を落として話し始めた。

「夏休みだったかな。相談があるって電話きたんだ。珍しいよ。碧は全然自分のことを話さなかったから。へらへらしてて、いつも楽しそうだったし。だから宿題写さしてもらえるし、相談にもものろって俺、珍しく意気込んで行ったんだ。したらさ、あいつ、自分のことじゃなくて、人のこと相談してきたんだ。それもすげー真剣に。」

「人のこと？」

「ああ。俺ら、俺とアオとひろみってやつでつるんだの。2年の時。で、三年の時、俺らクラスが分かれたんだけど、ひろみとアオは一緒だったんだ、アオが相談してきたのはひろみのこと。ひろみが、その、なんていうか、目をつけられてるっていうか、あーもう、なんつーの？言うならいじめ？受けてないかとかなんとか。」

「それがどうしたの？」

「いつてから気づいた。しまった。いじめに対して“それがどうしたの？”なんて普通の反応じゃなかったかな！？心配するべきだった????」

「いやあ、それがさ、あいつ、助けたい的なこと言ったんだよ。俺もいっしょにっつて。」

「よかった。やつぱり世の中は私が思ってるよりも暖かくない。生ぬるくない。冷たい場所だった。自殺をもって知ったことだ。」

「でもさあ。やばいじゃん。目、俺らまでつけられたら。それにそんなに深刻そうでもなかったしさ。ひろみも普通だったんだもんよ。すぐ飽きて終わるよって俺、言ったんだよ、アオに。そのまま俺帰ったんだ。その後なんの報告も相談もなかったから、ひろみのことは終わったんだと思う……。」

「なんでこんなに言葉を濁すんだろう。」

「その、ひろみくんって人、教えてもらえませんか？」

「え？ああ、別にいいけど。でもさ、俺が今言ったこと、黙っててくれる？俺、おかしい???」

「わかりました。言いません。おかしくなんかないですよ、少しも普通だよ。あなたは。それがこの世界のスタンダード。誰も映画やドラマのようにはならないって。わかってるから、大丈夫。あなたは普通。」

むしろ“秀作”の話をきいて、私の心はますます碧に吸い寄せられた。碧は“秀作”にも私にもない私の言う映画やドラマにだけ残る私のこの世界に対する最後の期待があつたんだと確信が持ててきた。「じゃあ、これ。」
とケータイを差し出してきた。

「ここ。赤外線」

「はい。」

すると“南山ひろみ”という名前とともに“ひろみ”のメールアドレスと番号が私のケータイに入った。

「ねえ。あんたさ、なんでそんなに知りたいの？」

「え？」

こいつ、私に似てるな。少し前の私に。碧と会うまでの私に。そして今の私に。

自分でだってわからない。こいつに似ているからおさらわからない。

私、普段ならこんなに知ろうとしない。すべてどうでもよかった。これじゃまるで私が本当に“かわいいそうない彼女”をしている。

私の言う、私がこの世界に期待しすぎていたことを私自身が行っている。

「そうだな。知りたいの。じゃないと、私も死ねないの。」
そう本音をもらして、席を立った。

本音を言ってしまった。私の心に変化が起きていたの？

本音なんて吐く必要もなくて大嫌いなことなのに。

でも、どうだっていい。

秀作とやらとはきつともう二度と会わないに違いない。

日曜の街は賑やかすぎる。自分の生きる力をまわりに吸い取られてしまいそうな気持ちになる。歩いているのもつらい。立っているだけで、気がめいる。

めんどろくさい。もう。なんもかんも。ああ。重いな。体も空気も重いな。どうしよう。倒れてしまいそうだ。

どうして、私はここに生きていなければならぬの？
どうして死ぬ権利もないの？

私、無宗教だし、バツもないと思うのよ。

ああ。もういやだ。碧に会いたいよ。

息が吸えないよ。

もう目だつて見えない。街中なのに視界がぼやける。

いやだ。

いやだ。

だめだ。

まだ知らなきゃいけないことがある。

やらなきゃいけないことがある。

そう思えば、まだ生きていられる。

もう家に帰ろう。

“南山ひろみ”に連絡しよう。

そして、早く知るんだ。碧のわけを。

また夢をみたいな。

起きているときに碧に会えれば見られる夢。

世界に残ったたったひとつの期待。

私はその日家に帰っても“南山ひろみ”に連絡しなかった。
家に帰ってすぐに部屋にこもってそのまま寝てしまった。

夢を見た。

久しぶりにみた夢だった。

真っ白な中で誰かが泣いている夢。

私は手をいっぱい伸ばして、呼びかけるのに、消えてしまった。目が覚めると私は泣いていた。

涙が流れた頬が濡れていた。濡れた頬をこすったら、なんだか無性に碧を思い出した。会いたいとこれほどまで思ったことはなかった。私の今の場所は、ここは、すべてがひどく冷たくて痛くて、思い出せば思い出すほど、あの頃のあたたかさや今の冷たさが際立って、混乱した。

朝のホームルームが終わった後、“南山ひろみ”に連絡した。電話には出られないだろうと思ったから、メールにした。

件名：はじめまして。

本文：高橋青子です。碧くんのお友達の南山くんに会ってお話したいことがあるんですが、今日会えますか？ end

いきなりでもう誘いのメールだったけれど、別にどうでもよかった。できるだけ早く知りたいんだ。そうして、その原因を引き裂きたいんだ。

放課後にケータイを見ると、返信が来ていた。

件名：Reはじめまして。

青子さん。秀作から聞きました。今日、会えます。6時に駅でいいですか？ end

件名：無し

はい。お願いします。 end

すぐに返信を打って駅に向かった。

まだ四時だ。

駅そばのカフェに入って行きかう人を眺めてコーヒーを飲んだ。誰も彼もみんな全部憎らしくなった。私が失ったものを、この人たちはまだ、いまだに手にしているんだろうか。どうして、私が失わなければならなかったのだろうか。この世界は、私を嫌っているの？もう、早く解放されたいのよ。

「ごめんなさい。待ちました？」

ぼんやりしていたら時間に遅れた。駅に向かうと“南山ひろみ”らしき人が立っていた。有名私立校の制服を着ていた。

「待ったよ。本当に。俺、6時って言った？」

「言いました。ごめんなさい。本当に。」

「いや、いいよ、別に十分くらい。それより、俺が本当に言っただけかと思っちゃった。俺、よく待ち合わせするとき場所言い忘れたり、時間言い忘れたりするからさ。」

そう言っただけで、“南山ひろみ”はケラケラと笑った。

結局駅に近い別のカフェに入って話すことになった。

「碧の彼女なんだっけ？」

いきなりさっくりした口調で聞いてきた。

「はあ・・・」と言葉を思わず濁してしまった。

「ふうん。でさ、聞きたいことって、俺と碧のこと？だっけ？？」

「そうです。仲良かったって聞いて、どんなこと話していたのか聞きたいんです。なんでもいいんです。碧が悩んでいたこととか。」

「ああ、そういうこと。」

そういって“南山ひろみ”はアイスココアを飲みだした。

1分ほど黙って、ひろみは口を開いた。

「彼女なら言ってもいいかな。碧と俺には秘密協定があるんだ。」と悲しい笑顔をした。あの日の碧みたいな、悲しい笑顔だった。

そうしてまたゆっくり唇を開いて話した。

「俺もアオも家族についての秘密があるんだ。俺はそれをアオに吐き出したことがある。そうしたら、アオは“自分にも秘密がある”って。辛いって。それをいってしまうかもしれない。だから、お前も僕に言えばいい。”って。そう言ったんだ。俺、本当にアオに救われた。結局アオの秘密が何かは聞かなかったけど、それでも、アオは俺にひとりじゃないっていう安らぎをくれたんだ。それから・・・」

「」

続けようとした口が、黙ってしまった。

ひろみは泣いているようだった。うつむいて、顔は見えないけれど、泣いていた。

それからひろみは顔をあげて、息を吸って吐いて、また話し始めた。

「俺、いじめ受けてたんだ。」

知ってます。でも言いません。言うなって、“秀作”が言ったので。

「それで、そのいじめつてやつ、ばれないようにやんだよね。うまいよね。相手もさ。それに俺も知られなくなかった。いじめられてるなんて。誰も巻き込みたくなかったしね。勉強も忙しかったし。なのに、アオだけは気づいたんだ。俺、言っていないよ？なのに、あいつは気付いたんだ。一回聞かれたよ。“いじめられてんじゃないのか？”って。でも、その時は否定した。絶対にかかわるなって、釘打つといたんだ。本当にアオはどうしても巻き込みたくなかったんだ。ほかの誰でもない、アオだけは。なのに、アオは・・・」

「助けたのね？」

口が動いた。

「そうなんだ・・・あいつ、俺が公園でリンチ受ける時に、来て、それで、一緒になって、殴りあって、殴られて・・・俺、アオを本当に尊敬したよ。なのに・・・」

悲しい。ひろみは泣いていた。泣かないで。きっと碧はそう思ってる。碧はあなたを大事に思っていたんだわ。

「ごめん・・・あなたが泣いていないのに、俺が泣いてちゃ、しょ

うもないよね。実は碧が助けてくれたのに、俺はそれをアダで返し
ちゃったんだ。」

「どういう意味？」

「アオは、俺に対するいじめのとはっちりを受けたってでもいうの
かな・・・。」

そう言うと、ひろみはまるで頭を下げた謝るかのような体制になっ
ていた。そのポーズのまま彼は話し続けた。

「俺を助けたから、俺をやったやつらが、アオにもムカついて、
アオもターゲットに入れたんだ。俺、最初のころはまだそれに気づ
いてなくて、言ったら？うまいんだよ、いじめる奴らは。でも俺も
気付いた。だって俺もやられてたんだからね。もしかしてって思っ
てつけたら、案の定だったってわけ。だから、俺、学校に行くのを
やめたんだ。きっと俺が原因だろうから。俺を庇うから、あいつら
もアオにムカつくんだよ。俺がいなくなればいいと思って。その後
はいじめなかったんじゃないかな。そう願ってたけど。」

「確かめなかったの？」

自分でも驚いた、少し怒りを帯びた声だった。

「うん。登校拒否してることもアオに言わなかった。言ったらまた
アオは平気だから学校に来て言うに決まってるから。なにも接
触できなかったんだよ。俺がいじめられてないってことが重要だっ
たんだ。そうすれば、アオは俺を庇う必要がない、だから木庭たち
もアオにムカつかない。そうだろ？」

そう言われてみれば、そんな感じも・・・。

あれ？今、“南山ひろみ”はポロッと加害者の名前を言った???

“木庭”って。

「だから俺、なんとかアオとの距離を置こうとしたんだ。だから、
それ以来あまり会ってない。」

また悲しい顔をしている。ひろみはひろみでなにかを抱えていると
わかるような表情だ。

でも胸騒ぎがとまらない。

「その、木庭つてやつ、どこの高校言つたか知ってる???」

「え?」

ひろみが怪訝そうな顔をした。

「教えてほしいの。大丈夫、あなたのことは言わないから。ねえ。

お願い。」

私があまりに必死そうに映つたのだろうか、ひろみは一瞬眉間にしわを寄せて、

「あいつら、たぶん、公立は全部落ちたと思うよ。いいところの私立にはもちろん入れないし。どうだろ。ああ、あそこじゃないかな。俺も確信があるわけじゃないけど、これはあくまでも俺の予想だけど、桜一河高校じゃないかな。あそこ、ここらへんで一番偏差値低いところだから。」

偏差値低いつて・・・。そっか、木庭つて人、頭悪いんだ・・・。それをこんなにはつきり言うひろみつて・・・。

「ありがとう。あなたに会えてよかった。」
「こつちこそ、ありがとう。アオはずつと俺の親友でヒーローだから。それを伝えられる人がいてよかった。」

少し恥ずかしくなるようなこともこんなにもはつきりと言った。

ひろみはそういう人なのだと、やっとわかった。

ひろみと別れたあと私の胸騒ぎは止まらなかつた。なんだろう。

胸がざわざわして、怒りがこみ上げてくる。ああ、逢いたいな。碧に。

わかつてる。

わかつてる。

逢えない。

でも、どうしようもなく逢いたいよ。

なんだろう。狂いそうなのこの感覚は。

ただ逢いたいだけなのに。

今はこんなにも不可能なことなの?

ねえ。木庭はあなたに何をした?

私の毎日。

首の皮一枚でつながっている生首みたい。

ふっと思っいたら死んじやいそう。

こういうの、世間的には病気なのかな？そんなことないのかな？本当はみんなそうなんじやないの？

だって思う。みんなきつと何のために生きているわけでもないんじやないかって。本当はみんなわかってているのじやないかって。でも不安だから、ふっと死にそうになるから、必死に何かでカモフラージュしてるんじやないかな？

でも、みんなそれでどっちが本当かわからなくなるんじやないかしら。

そうしてみんな誰も彼も満足そうにして、そうして他人に目もくれないで、幸せを求めて、純粹なふりでもして、いいえ純粹と思いつ込んだ不純者になって悪びれず悪いことを平気でできるようになる。

そうして、世間一般の“いいこと”を他人にすることで、自らを“いいひと”に作り上げて、幸せになるんだ。

意味なんてあるもの、この世にないんじやないの？

私は腐っている？いやなこ？

ねえ。どうして私はどんなに頑張っても、なにもないのかな。

努力が足りないんだわ。

でも、もうずっとそうなら、いまさらもういいや。

ねえ、なら、なおさら、どうして私にたった一つしかなかったこの世のすべてを持っていたモノをさらっていったの？

これは誰への問なのかな。

一生抜け出せないトラップの中にもいるのかな？

それとも一生抜け出せない悪夢のなかかな。

もう、どっちでもいい。

消えてなくなることすらできない私に、もう何も残っていない。

考えるトラップに絡まったら、私はいつも碧を思い出す。

なんでもないことを思い出しては涙が流れるけれど、これは不純な

のかな。

ドラマの影響なのかな。こんな風に泣くの、馬鹿みたいかな。でも止まらないの。誰にも知られたくない。いいえ、知られてはいけないんだもの。そうして最後にまたたどりつく。

必ず碧の復讐をしてやろう。

たとえその相手が神様であっても。

ねえ、私のたった一つ、それはなんでもない、あの日々だけに詰まっている。

だからもう、これからの私なんて意味どころか存在もないのよ。

あるのは碧の死の理由をさぐることだけ。

どこまでも私は碧に依存しているような気がする。

眠ったら一生起きないような気がするけど、それでも朝がきて、それは私に絶望を感じさせ、そうしてまた私は目をあける。こんなことを考えるのは、罰あたりだと、わかっていた。それでも、それは、私のなかでは朝が来ることのほぅがずっとずっと私自身への罰となっていたから、どっちもどっちなんじゃないの？なんて思うの。

木庭。

木庭という名前しか確かな情報がない。

しょうがないから、中学のアルバムを開いた。

もらってから一度も開いていなかった。

インクのおいがこもっていた。

1組から順に目を通していった。

不思議なことに碧を見つけることはなかった。

時間も無いし、すべるように目を左から右に流していった。

木庭修司。

幸いにも“木庭”という苗字の男子生徒はひとりしかいなかった。少しも笑わず、だけれど、見ているこちらがとても不愉快になるような表情だった。こばしゅうじ。こいつの顔を頭に焼き付けて、アルバムを閉じた。

放課後、ひろみが言った、馬鹿な私立学校に行ってみよう。

行ってどうなる？何百人という生徒のなかから、この顔をひとりひとり探すのか？しかもその学校に確実にいるというわけでもないのに？

自分でもおかしいと思っていた。でもそうせずにもいられなかった。どうしようもなく早く知りたかった。

ううん。知ろうとする行為を行っているということが必要だった。そうでないとまた蘇る。あの声もあの顔もあのすべてが、私をどこかにつれていってしまう。壊れるような波がやってくる。

まだ怖い。

だから、碧にまたしがみついています。

それを理由にしています。

それでもそこにも意味があるのだと、私は必死に思った。

学校にどうやって行って、どうやって教室に入って、どうやってすごしたのか全く覚えていない一日の終わり、もう何度も迎えた。

それでも、私の体はただただ動いて日々を過ごし、“生活”している。

ひろみの言った馬鹿な私立学校、桜一河高校の校門が見える場所に立ち、ケータイをいじるふりをした。

部活組が帰路につく七時半になっても、アルバムから焼き付けた顔は通らなかった。

しまった。そうだ。その木庭がどうして真面目に学校に来ているという前提を私はもったのだろうか。

もっと考えれば、間違いがもうひとつある。

アルバムをみたなら、最後の住所録も見ればよかった。

そうすれば家まで行けたじゃない。

ああ、馬鹿みたい。

今日はもう遅いし、マックによってひとりでご飯でも食べて帰ろうと思った。

桜一河高校から駅に向かって3分ほど歩いたところにあつたマックに入った。

マックつて、いつ来ても子供の巣窟のようにうるさい。

特にこの時間帯と休日の昼間は学生が山ほどいて、会話が成り立たないほどだ。

そんななかで、チーズバーガーセットを頼み、一人で座れるカウンター席についた。

「まじかよー。それ、はんぱなくねえ!？」

「だからよ、俺、一発かましてやったの。したらよー」

「はー?お前、女でも殴れんのかよ。」

「関係ねえだろ。」

はあ、今日は失敗ばかりだ。

後ろのボックス席がうるさい。

さっさと食べて出ていこう。

そう思ったとき、

「だから怖えよ、木庭は。」

え？

「うつせ！」

木庭つて、言った？

そうだ、木庭なんて苗字そうそうない。

そして、ここは桜一河高校の近く。

私の今日の目的は木庭修司に会うこと。

ゆっくりと後ろのボックスに目をやる。

そこにはアルバムから頭に焼き付けた顔が少し日焼けしてあった。

私は“さつさと食べて出ていく”のをやめた。

木庭たちが出て行くまで、のろのろと食べた。

木庭たちが席を立ち、ごみも捨てないで店を出るのに合わせて私も
出た。

木庭と仲間がいるうちに会っちゃだめだと私は本能的に思った。

木庭が一人になるまで待つしかない。

木庭一人でも、私は怖くてたまらなかった。

さつきの会話が頭を駆け巡る。

「女でも殴るのかよ。」

どうしよう。

どうしよう。

頭の中はパニックなのに、足はただただ木庭の集団をつけていた。

「そついや、あいつ自殺したらしいよ。」

「はあ！？誰が？」

「だから、アオ。桜井アオだよ。中学の。」

私の全神経がこの会話に向けられた。

「まじかよ、やばくねえ？俺ら。」

「いじめが原因だったとか言われて見つかったらやばいって。」

「馬鹿だろ、お前ら。俺らがやったつていう、証拠ある？ねえだろ？それに、誰も証言しないぜ。証言するやつなんかいねえよ。あのひろみとかいうやつ以外よ。」木庭がそう言った。

一人の男がおびえる風にまた言った。

「ひろみがいつたらやべえじゃんか。」

木庭は得意げな顔をした。

「だからおまえらは馬鹿なんだよ。ひろみが言うと思うか？アオをいじめたしたら、登校拒否したやつだぜ？そんな奴に何がいえんだよ？」

「だ、だよな。そうだよ。はははっはは……」

私の心は静かだった。

ひどく静かで、それでもあいつらにただただ死が訪れることを思った。

それがたとえ人工的でも。

碧をそう追い込んだように。

私は自分の口角があがるのを感じた。

それからどうやって家に帰ったのか覚えていなかった。

ただもう、木庭を消すこと、それだけを考えてた。

碧にしたように。

お前にも死をくれてやろう。

私はもう、なんでもいいのよ。

第十三話：碧

ねえ、碧。

私はおかしいと思う？

これから、殺人者になろうとしている。

なんの計画も思い浮かばない。

どうして、いじめられていたその時には死ななかつたのに、私と出会った後に死を選んだの？

木庭のせいで、死に向かったわけではないのかしら？

それでも、碧に苦しみを与えた木庭を、私は許せない。

これは私の自己満足のためなのかしら。

碧、あなたの名前を思うのは、私の勝手な理由づけかな。

こんなふうに、話かけても、なんの返事ももらえないこと、わかってるわ。

もうずっと、語りかけすぎている。

やめよう。

やめよう。

やめよう。

私のなかの碧になってしまふ。

都合よく、作り上げた碧になってしまふ。

それはいやよ。

そう言えば、いまごろふと思い出した。

ひろみはいじめの話をしたとき、秘密の話もしてくれただけ。

なんて言ってたんだっけ。

思い出したい。

思い出したい。

“秘密協定”

俺もアオも家族についての秘密があるんだ。

アオは“自分にも秘密があるって。辛いつて。それをいつてしまうかもしれない。だから、お前も僕に言えばいい。”って。

結局アオの秘密が何かは聞かなかったけど

秘密？

私、そんなことも知らなかった。知りたかった。知りたかったよ、碧。“抱え込まないで。”なんて私もばかにしていた言葉だったっけ。でも、私たち、すごくわかっていただけけど、まだ知らないところもたくさんあったね。現実的なことも、もつともつと話して、分かり合えたのにね。どうしてそれをしなかったんだらうね。わかるようでわからないわ。どうしてかな。

わからないわ。

そんなことを考えていたら、いつの間にか私は眠りに落ちて、夢を見た。

いつもの夢に似ていたけれど、それは悲しくはなくて、ただ薄いブルーに包まれたようなそんな中にぼんやりとただいる夢だった。起きたら泣いていた。泣いて迎える朝はこれで何回目なのだろう。もう、私の心なのかどうかすらわからなくなりそうだ。

でもその日私の目覚めの涙には、なんだか温かさが残っていた。なのに無性に心がさみしくなった。どうして？

私はおかしい。

碧のことを出して、なにかに八つ当たりしたいだけなのかな。木庭を殺してしまうなんて、できるはずない。

でも……

おさまらないのよ。どうしたらいいの？こんなに混乱しそうな状態、

わからないのに。木庭への復讐を思えば、バランスが保てるような気がする。

なんて、これも含めてもう、私はおかしいのだとやっぱり思う。

今日も目覚めて、着替えて、飲み込みたくもないごはんを口にねじ込んで、お母さんに元気を見せて、お父さんに笑顔を向けて、学校へ向かう。

そうしてなんでもない風に装って……。

もう、疲れた。何もしたくない。

こうしてみても初めて気付いたんだけど、正常も異常もないんじゃないのかな。

私がしていることは異常なのに、正常なもの。正常のふりをした異常。

これじゃあ、誰も、精神病も見破れないし、殺人を未然に防ぐなんてできないはずだよ。誰もわからないんだから、本人だって、たまに分からなくなるのに。

それでも私は体を起こして、着替えて、飲み込みたくもないご飯を口にねじ込んで、お母さんに元気に「いってきます」を言って、お父さんに笑顔を見せた。

でも、私の足は、学校へ向かわなかった。

気がついたら、泣いていた。

とうとうおかしくなったんだと、本気で思った。

泣きながら歩けば、変人だ。周りの人が、「なんだこいつ」という視線を投げかけているのがわかる。

でも、どうしよう。とまらないの。涙が。

何なの？これは。泣きながらも、私の足は動き続けた。

碧、もう一度でいい。

私を笑わせて。

あなたが笑えば、私も笑えるから。

気がつくくと、碧の家まで来ていた。

ほとんど病気だな、これは……。なんて思った。

だって、碧の家に来たのは、クラスメイト全員で参加したお葬式の日、一回きりだ。その日も、事実を受け入れたくなくて目をそらして、碧の“ただのクラスメイト”を演じるのに必死で、記憶がほとんどないような感じだった。それなのに、私はその場所を明確に覚えていたの？

どうしよう。

もう、家に帰ろうかな。

でも、帰ったら、また聞かれるんだ。「学校で何かあるの？」

もう、だまって。

私にかまわないで。放っておいて。

いやだいやだいやだ。

誰にも何も話したくない。すべて、私の中にしまっておきたいのよ。私の中に大切なものをすべてしまいこんで、その中で呼吸をしたい。誰にも何も言わせたくない。現実から目をうまく逸らして、夢のみに生きていきたいの。お願いだから、そうさせて？もう、現実に関連してこないで。ずっと夢の中にいたい。

明けない夜を願った。眠ってしまったと夢ならいいと思った。

あなたのいない現実なんてありえない。ならこれはやっぱり悪夢だ。

ずっとずっとそう思っているの。

ガチャ

そんなことを考えていたら、目の前の扉が開いた。

黒い着物を着た女の人が目を赤くしてこちらを見ている。

「あ……」

思わず口が開いた。

「あの・・・私・・・」

「アオコさん？」

「え？」

「アオコさんでしょ？」

「あ、はい。そうですけど。」

「よかった。」

そう言っただけでほっとしたような顔をした。

「あがってください。」

どうして、私のことを知っているんだろう。

一言も話さないうちは広い家の中を歩き、線香をあげた。

碧の家がこんなに立派だなんて知らなかった。

だけど、碧のぬくもりも香りも、この家にはない。どうして？

「アオコさん、こちらへ来てくださる？」

と連れていかれたのは二階の端の部屋。

扉が開かれた瞬間、私は倒れそうだった。

そこは碧の部屋だった。

無機質なように碧を感じないこの広い家とは正反対に、この部屋に

は碧がいっぱい詰まっている。碧の香りがした。

「アオコさん、アオと仲良くしてくださいのよね？このも

のすべて、アオコさんに見てほしいんですって。それだけ、たった

それだけが書き残してあったの。それだけが・・・」

最後まで言えないような声だった。

私はただぼんやり見ている。息をしないような気持ちになった。

「どうぞ。」

と言われて、中に入った。

すうつと息を吸いこんだ。瞬間涙があふれた。

ねえ、碧。どうぞしよ。

ここに今いる？

「どうぞ、ゆっくりいらっしやって。私、お茶入れてきますから。」

私の涙を見てか、自分の涙のためか、碧のお母さんは部屋から出て行った。

こんなに、こんなにたくさん碧を、あなたを、もらっていいの？
どうしよう、涙が止まらない。

碧は私に何を残したかなんて、考えなくてもよかった。

すべてだった。

失っていなかった。

私は碧をすべて手にしたのだ。

彼のすべてを。そうそう得られない、誰か他人のすべてを、私に残した。

机の椅子に座ってぼんやり部屋を眺めていた。息を吸っては吐いた。いつも苦しいその行為はここでは薬のように癒してくれて、お菓子のように甘かった。

机につつぷして窓の外を見てみると、窓から風が入ってきて、私を包んでいった。変なの。涙がまた出てきた。感傷的にでもなっているのかな。

碧もこの景色を眺めて、そうして毎日を過ごしてきたのよね？

生きてきたんだよね？

心が休まった。もうずっと苦しかった心が、羽の上にも浮いたようにそんな感じがした。

ここのすべてを見て感じる間、私はまた碧と共に生きるんだろう。

立派な机。

鍵付きの引き出し。

はっと思った。

いつだったか、手品の仕掛けで鍵を私に渡してきたことがあった。彼はそれを「あげる」と言った。私の鍵。心の鍵。碧に出会って、

束の間の休息があつて、碧の死が固い固い鍵になつて、私の心は閉じたけれど、あの鍵はここにある。私の胸にペンダントとして掛つていた。

急いでペンダントを取った。そして引出しの鍵に入れた。

いつになくドキドキした。碧をまるで愛してるみたいに、碧の心を覗くような気持ちだった。鍵を回す手が震えた。かちやと小さな音がした。

ぎつと引つ張り出すと、そこにはたくさんメモ紙と写真とそれからノートが何冊も。なんの変哲もない大学ノート。表紙には日付しか書かれていない。日記？

たくさんメモ紙を取り上げて読むと、そこには走り書きで『もう聞きたくない。』とか『母さん、ごめんね。』とか『笑えてくるそう、笑いだ。自分を笑つてあげようよ。』とか書いてあるかと思うと、すっかりした文字で詩が書いてあることもあつた。ほとんどは碧の自作のようだったけれど、ところどころに詩人のものがあつた。金子みすずの『明るい方へ』だったり、中原中也の『汚れつちまつた悲しみに』だったり、他には吉野弘と書いてあつたけれど、私はその詩人を知らなかつた。蜉蝣の話を書いたことがあつたつけ。それはきつとこの詩を読んで私に話したんだわ。

その詩たちは私の心に寄り添うようにいてくれた。碧が私と共にいてくれるように。

写真はなんてことのないものだった。道端のお花だったり、この家だったり、私の写真もあつた。そして、あの階段の写真も。階段の写真はほかに比べかなりの数だった。まるで上っていく様子がわかるように。

そうして、最後まで上つて、あの場所についてから、私はノートを開いた。一番初めの中学一年生時の日付。

碧の文字は綺麗で、だけれども癖があった。

十一月十八日

僕の記録。

僕の生きた証。

誰のものでもない、僕の証。

これを残してなんになる？誰が読む？

誰も僕を必要としないよ。

特に母さん。

なのに、母さんの日記を読んで、僕は日記をつけ始める。おかしなことだね。

笑っちゃうね。

僕の悲しい事実をここに書いたら、認めてしまう気がして、ここにも書けない。僕の事実は僕の中にしか存在できないのかな。

誰か助けてなんて誰に向かって言う言葉なんだ？

誰かって誰だ？

十一月二十日

ぼんやりとしていて、とても早く時間が過ぎ去ったような気もするけれど、同時に一秒も進んでないような気がした。ずっと苦痛のなかに置き去りにになっている気持ちもする。

あれから、あの屋根裏へは行っていない。母さんと父さんの顔を見るのが怖い。会いたくない。

だけれど、必死で弁解をして、自分の存在の怖さを、恐ろしさをすべてを取り繕いたい気持ちもした。

僕はどうしたらいいの？

これは誰への問いかけなの？

十一月二十五日

もう、この記録に頼るしかないような気持ちがあるんだ。

どうして？

どうして?????

息が苦しいよ。

“ 悲しみのために押しつぶされなくて ”

なんて自分で書いて自分で癒されて、自分でまたその言葉を笑って。

どうしたらいい？

どうしたら.....

十一月三十日、この日の日記は書きなぐってあった。

うるさい！

黙れ！

この世界の何が僕に何をしてくれたんだ？

この世界を生きることなんてできない。

腐ってる。腐ってるんだ。

僕をその中で生きさせたいのか!!!!!!

うるさいから、もう黙れ！

碧が考えていたことは何？
何がこんなに碧を追い詰めてるの？

ページを数枚飛ばした。

四月五日

手紙と父さんと母さんと。僕をこんなにも苦しめるなら、もうそのすべてがなくなってしまう方がいいのに。

僕を愛しているだって？父さん、笑っちゃうよ。

父さんが愛しているのは愛人の“あの人”だけだ。じゃなかったら、僕に“あの人”の名前なんかつけないよ。

母さんはきつと気づいてる。だから疑う。それでも信じたがっている。父さんを愛しているから？愛ってなんだ。ずいぶん都合のいいものだな。

愛なんてもの、ただの自己正当化のいい理由にしか聞こえない。僕はそれを信じない。

僕はもらってきた子供だって？

僕は父さんの愛人の子供だって？

そうだろ？

どんなに愛だとかなんだとかいっても、事実はその一点に終結してしまふ。

父さんは僕を追い詰めることに気づいていない。父さんは自分の美しい思い出を振り返るように僕に語って聞かせただけで、僕のことを少しも思いやってなんていなかった。僕の“本当の母さん”とかいう碧からも僕は少しも愛だとかいうものを感じない。

僕はもう、なにももらえない。すべてをかなぐり捨てて、このまま消えてしまいたい。これが遺書代わりにでもなつて。

でも、怖くて死ねないんだ。どうしたらいい？

手首に刃を当てても怖くてしょうがない。どうしたらいい?????

このまま凍結して生き続けるしかないのか……。

生きることがそのまま地獄になるとはおかしなことだ。

碧が養子だった？それを碧は知っていたの？なんてことなの。碧のあの悲しい笑顔はここから来ていたの？

養子ってだけじゃないんだもの。愛人の子？自分の存在を疑っちゃっている。自分自身の存在に嫌悪感すら持っている。

五月十二日

毎日、疲れる。

神様が、もしもいるなら、彼は僕を殺したいのかもしれない。それなのに、殺さないで自分で死ぬように仕向ける。

この上ない苦痛を浴びせかけて。なんて、神様なんていないぜ。

母さん、ごめんね。

僕みたいなのがいて、ごめんね。母さんにこの名前を呼ばせるのがつらい。

五月十六日

今日は少しだけ気分がいい。風が気持ちよくて部屋の窓から入り込む風にあたって一日中すごした。

もし生まれ変わるなら、こういうものになりたい。でも、もう生まれ変わるのもごめんだな。

五月二十日

生きている。今日も。きっと明日も道化を続けるんだ。

母さんに罪悪感を抱きながら、この命が続いている。どうしたらいい

いかなんてもう考えるのやめよう。

ひろみに話そうと思っても話せない。口が震えて話せない。詰まる。

母さんは、僕を愛している？

愛なんて信じていないくせに、ほしがる僕はどうかしている。

六月十九日

ああ、もう疲れた。

誰か言つて、もう休んでいいよつて。

六月二十日

梅雨は心が休まる。どうしてだろうな。雨の音が僕を包んで、消してくれる。

目を閉じて、今日はゆっくり休めそうだ。

六月三十日

今日は期末テストの答案が配られた。ひろみと木庭の危ういやりとりが感じられた。怖かった。ひろみに釘をさしといたけれど、どうだか。何もなく終わるといいけれど。

ひろみをこれ以上大変な位置に置きたくないんだよ。あいつは純粹に母親が好きだから。

七月十一日

思考性なんてなくなっちゃえばいいんだ。僕も。

人間が人間であるのには、思考がきつと必要だ。裏を返せば、思考がなければただのサル、ただの動物と同じなんだもんな。

だったら、早くなくしてしまいたい。僕を苦しめる、僕の思考を閉じ込めて壊したい。なのに、どうせ壊れないんだろ。知ってるよ。

碧の言葉はいちいち私を包み込んだ。碧になんどもなんども恋した気分だ。

一番最後のノート最終ページを見た。

七月一日

青子

青子に出会えて、すべてを知った気がする。青子が笑うのだけがうれしかった。

青子がいてくれるところで、僕は僕になれた。

青子が笑っていればすべてがずっとずっと明るんじゃないかと思う。

だから、僕の最後の道化をあの子にあげたいんだ。

みんなが笑う僕の死を。

木庭が教えてくれた唯一の役立つこと。

1回だけしか出来ない僕の道化。

きみの笑顔のためだけの道化。

笑ってほしい。

死ぬって怖いと感じていた。僕が家族のなかで異質なやつだと知っても、悲しくても、いじめられて本当につらくても、怖くて死ねなかつたけど、今はとても穏やかだ。僕は死ぬことに対して、とても幸せを感じているんだ。

死は逃げでもなく、生きることの放棄でもない。今僕の決心した死は笑顔のための死なんだから。僕は幸せです。

青子にこれを読んでもらいたいと思うのは、ただの僕のがままです。そして、僕の大好きなものたちを、青子にあげたいと思うのも僕のがままです。

でも、そうすれば、僕は青子とずっといっしょにいられると思うんだ。それを青子もわかってくれるよね？
もう一度だけ書かせて。

ねえ、青子。

僕は、幸せです。

涙が止まらない。

碧が死んだのは、私のため？

私の、笑顔のため？

そんな。

そんな……。

碧が私を思ってくれていた。

その前のページをばらばらとめくると、私たちのなんでもない思い出が綴つてある。それでも、それはとても愛しいこの世のすべてだ。わかつてる。わかつてるよ。

涙がとまらない。

碧、碧、碧!!!!!!

私、あなたを殺してしまったの???

ああ、憎むべきは自分自身だったの???

それでも、その気持ちを芽生えさせた木庭への憎しみがあふれ出して、このままじゃ、苦しい。

碧、あなたをすべて手に入れた私は、この先も生きていかなければならないかしら。あなたと一緒に生きたいよ。
生きたかったよ。

私は碧のその引出しの中身を鞆につめた。そして「また来ます。」と挨拶をして碧の家をでた。

木庭に復讐を。

その気持ちは変わらなかった。むしろ強くなった。これは単なる八つ当たりだ。

でも、それでも、碧をいじめたという、その事実は変わらない。あいつに復讐を。力じゃ敵わないのなんて知っている。だから力で行うのは無理だ。だけれど毒は手に入らない。あいつに近寄らなければならぬ。

女の子を雇おう。かわいいくっておバカな女の子。援助交際でもしていそうな女の子をひっかけて、援助交際以上のお金をあげる。そしてあいつに近寄らせて、あいつの飲み物に入れてもらう。

毒は簡単だ。塩素系の洗剤を入れる。あれで死ぬかしら？死ななかつたら何回かに分けるしかない。

でも臭うかしら。

なんて考えるだけでも心が晴れるな。

私は狂っている？

いったいどうしたら正常なのかしら。

誰かそれがわかる人いらっしやる???

その後、家に帰った。

お母さんに案の定驚かれて、おろおろされたけれど、具合が悪かったといって事なきを得た。(むしろそれゆえに、リンゴを持ってきたり、飲み物をもってきたりとやたらと世話をやいてくれた。)それから部屋に籠って、ヘッドフォンでピンクフロイドを聞きながら碧の記録を読みふけた。碧がこの世界に絶望していたことを知った。けれど、彼には絶望だけでなくて、ちゃんと人に対する愛情が

残っていた。この世界にまだ絶望しきれていなかったのかもしい。

今思う。碧を守りたかった。ひろみに対する感情や、家族に対する思い、お母さんに対する思い。碧はこの世界を愛しいとまだ感じていたんじゃないのかな。

ヘッドフォンで音楽を聴いていると、ひとりになれて落ち着く。この世界にひとりのような気持ちになって、私を責めるものがなくなる。なんて、私は何に責められているのかしら。ヘッドフォンで音楽を聞いていればどんな人ごみのなかでも“ひとり”になると、“孤独”になれるとどこかで聞いたっけ。

それでも、この部屋でヘッドフォンでピンクフロイドを聞いて、碧の記憶をたどれば、私は決して“ひとり”じゃなくなる。碧と“ふたり”だけになる。あの頃みたいに。

そうすればするほど、どうしても拭えない思いが、浮かんでは消えてくれないんだ。

碧にあつてやっと生きようと思えたのに、こんなにも、こんなにも碧と生きたかったのに、どうして私は彼を失ったんだろう。

あといくつ失えばいい？

あとどれくらい、私の望みを押しつぶして、うちのめせば気がすむ？

だけど、なら、私が望まなければいい、それだけのことだ。

なんて、そんなにまで世界が私中心のわけはないんだけど、なら、なおさらのこと、なぜ私からばかり、大切なものは奪われるんだ。

もう、いい加減にしたいの。

ここから消えれば、なにもなくなる？

私の苦しみも、絶望も、悲しみも、すべてきれいに消してくれる？

私が木庭に行く復讐よりも、もつともつと簡単なことがある。それは私が死ぬことだ。

たとえ死んでから碧に会えなくても、それでも、私は消えて、私のこの醜い感情も、思いも、苦しみもいっしょに消えてくれる。そうでしょう？わかっている。

死ぬことは逃げることで、生きることの放棄でもない、碧も言ったね。

私は、私は今、生きることが放棄しようとしているかしら。

ああ、でも、碧からもらったものたちをおいて死んでしまうことも苦しい。

ねえ、生きるのも、死ぬのも苦しい。生きるのも、死ぬのも一緒っていうのは、こういうこと？

“それらしく”なんてできなかった。心の中で見下して優越感をもって、自分は違うと思いつけた。そうして、その仲間いりを忌み嫌ったばかりに、私は死のうとした。それはスタンスのための死？

死ねなかった。無様だった。自分は“自殺を図ったかわいそうな子”を“それらしく”演じることができた。

誰もそれを見破るなんてできなかった。

でも、私はそれを望んでいた。また、心の中で見下した。「お前らにわかってたまるか。」

なのに、どうして何度かそのことに涙したんだろう。

心を凍らせてもなお、勝手に溶けだした。

碧に出会ってから、全く心は油断した。和らいだ。たとえば、その時だけでも、私は“幸福とは何か”を知っている気だった。

いっしょにすることが、どうしてこんなにも“幸福”なのか、とても不思議だった。彼に出会って、私は涙を初めて流した。あんなにも、生きていることを愛しく思えたときはない。それがどうしてかも、私はまだ、言葉にできない。

どれだけの生きる理由を彼につなげていたのか、どれだけの私の思いを彼にそそいでいたのか、わからないけれど、もうあれほど何かを愛おしいとも、望むこともできないだろうな。

そうして思った。碧のためなら死んでもいいと、思った。古いつまらない映画のセリフのようなことを、本気で思って、実感したんだ。私の目は開いた。

私のことよりも、碧のことが気になった。なのに、どうして、碧が、死んでしまったのだろう。

私はもつともつと気づけたはずだ。私が心を休めているばかりではいけなかったのに。私の方がずっとずっと強くなって、碧を守ってあげるべきだった。

何をしていたんだろう。あの幸福にうずくまって、その時が続くことだけを思って、ただ存在していたなんて。

もう、触れられないのに、手がその先に碧を求めて、私の皮膚のすべてがああ空気をほしがって、呼吸はそこでしかしたくないと苦しがる。

もう、届かないのに、何度も何度もその名前を口にして、あの声を待ってしまっ。

思い出せなくなりたくない。もう、忘れ始めている。いや、忘れていない。

思い出せば、思い出すほど、いいように記憶を造り変えそうで怖いのに、なのに、思い出していないと忘れてしまいたいようで、やっぱり怖い。

それを理解している気ではいるけれど、これを口にすることはできなかった。

つまりまだ何一つ、私は認めることができないでいる。すぐまた別の何かをひっぱり出してきて、またそらす。

誰もそれに気づかないでほしいと思いつながら、すべてに気づく誰かを、碧を待っている。とんだヒロインだ。

ずっと頭の中がごちゃごちゃしているのに、それを見ないふりして、それはそれはすっきりした様子で過ごしてきた。それが可能だったのは、碧の死が鍵になって、すべてを凍らせられたから。だけど、足りなくなってきた。

今は、傷つかない心と体がほしいの。

嘘、もうずっとほしいの。

凍らせるだけじゃたりなくなった。

もっともっと強くなるには、全く傷つかない体がほしいんだ。

どうしたら手に入る？

どうしたら手に入る？

私だけのための私だけの祈り。

私だけのための私だけの歌を。

私だけのための私だけの思い。

どれも、するのは、私だけだって、そんなことずいぶん前から知っているの。

傷つかないからだところかほしいの。

そうして、どんな人にも平等に接したいんだ。

そうして、誰にでも同じ笑顔を振りまいて、自分の株はウナギ登り。

こんなことがしたいのか？

違う。

私は碧に逢いたいだけだ。

それがどうしてこんなに難しくなったの？

涙が流れ始めたのがわかった。だって頬が濡れている。

「泣かないで。」

だあれ？

「泣かないで。」

ああ？

「キミをそんなに泣かせるためにしたかったんじゃないんだ。」

しってるよ。ごめんね。ないてばかりで。

「謝らなくていいんだよ。もうずっと、たくさん謝ってきたね。僕も、青子も。」

ああも？

「そうだよ。もう、謝らなくていいんだよ。」

だって、わたしは、わるいからだから。せかいをみくだして、いやなことばかりいって。だから、みんながおこって、わたしをころそうとしてくるんだ。

「違うよ、青子。青子は知っているでしょう？知っている分、優しくすることもできるんだよ。他の人よりずっとずっとやさしくなり得るんだよ。」

でも、わたしはそんなにつよくないの。

どうして、わたしだけがやさしくしていなければならぬの？
だれもわたしにきづかないのに。

「青子、それもキミは知っているよ。強い、強くなっているよ。そもそも強いも弱いもないことを、青子は知っている。それはとても

強いことなんだよ。」

だから、あおこがやさしくするべきなの？

「それをキミも望んでいたんだ。ずっとずっと。優しく強くなりた
いと。なのに、いつのまにか青子の心はそのため一人ぼっちにな
った。そうでしょう？僕もそうだったから。それでも、僕は思うん
だ。」

なあに？

「だから、僕はキミに出会えたんだ。青子に。こんなふうに出会え
て、互いを鎖のように思えることが、そんなにあると思う？そして、
それに気づけて時をすごせるなんてことができると思う？あんな人
たちに？」

ううん。

「それでも、あの人たちが、青子より幸福だと思う？」

ううん。

「ほづらね。やっぱり知っていた。」

うん。でも、碧にいまきいてわかったの。

「僕だって同じだよ。青子に逢って、わかったんだから。」

そうかな？

「そうだよ。」

そうだね。

「それにね、僕も、青子も、もう一人じゃない。気づかれないと嘆かなくていいんだ。青子が僕を思ってくれて、僕が青子を見ているから。」

本当？

「うん。」

「それに、青子と僕が出会ったのは、この世界だ。」

あ。碧の笑顔が。待って。待って。もう一度だけ触れさせて。もう一度だけ……

碧が私にキスをした。

「もう、泣かないで。」

目が開いた。

どこからか夢なんだろう、と思ってクスッと笑ってしまった。頬には涙の跡があった。

昨日カーテンを閉め忘れた窓から光が降り注いでいた。

息をした。

夢も現実も一緒に、生も死も同じことだった。

私は澄み切ったような気持ちになった。

「ねえ、碧」

何度も心で呼びかけたことを口に出した。初めて出せた。

今日はお母さんにおはようを言おう。

お父さんにありがとうの気持ちを言えるように。

学校にいつて、みんなの気持ちを無視しなくても大丈夫だわ。

強くあれることに気付いたから。

誰もそれに気づかなくても、碧は知っている。

夢？

どっちでもいいのよ。

もし、この世界に終わりがきても、きっとここみんなは繰り返すだろう。戦いを、破壊を、醜さを人らしさとして、寂しくもないとそれすらに気づかないんだ。

碧は多少狂っていたかもしれない。

私を笑わせるために死ぬなんて。

でも、狂わせたのは誰？何？

友達？いじめ？家族？社会？世の中？

誰にもわからない。

もし、これが理由ならこの地球上の何億人もの人が狂っていることになるもの。

なら、碧がそうであったように、

私も人間であるのだわ。

狂っているのよ。

異常なんだわ。

そうして生きていくのでしょうか？

碧、

私生きていくよ。

大丈夫。碧、私はやっとわかったから。

永遠の意味がわかったの。
そう。

どんなに形が変わっても、変わらないことがあるって。自分のこととして受け止めることがやっとできるようになったの。

ねえ。わたしが大切にするものは、一番の大切は、わたしが死ぬまで、死んでからも、何も変わらない。

たとえ、わたしも、あなたも死んでしまっても、ここで出会ったこと、してきたこと、描いた願いや、大切さは、何一つ、嘘にも、幻にもならない。

永遠をもっているから。

形にこだわって、逢えないと嘆いたのは、それに気づいていなかったからだわ。

今は、はっきりとわかる。

「形がかわっても、変わらないということ。」があるってことが。

言葉にしたなら、これだけちやちになっってしまうけれど、その実感はこんなにも強いものだったわ。

ねえ。もう少しだけ待っていて。

宇宙はひろいから、いっしょにいこうね。

それまで、あなたは、世界をみていて。

あんまり外に出なかったから、知らないこともたくさんあるでしょう???

わたしも、がんばっているんなものを見ていくから。

そして、いつか、また逢うときには、いっしょに宇宙を見に行こう?。

約束。

永遠をもった、約束。

わかっているの。

また出逢うって。

永遠に。

愛している

たとえ、あなたを地球に返さなければならなくなったのだとしても、
なにも変わらない。

愛している。

ずっと。

ずっと。

愛なんて、気易く私のような小娘が語るなど誰かがきつと言っわ。
でも、私は知ったから。

愛なんて、ただのマスメディアの作りものか、宗教の産物だと思っ
ていたけれど、そうじゃないこと。

私がいつか、地球に戻るとき、あなたとまた一緒になれる。

そしたら、戻ってこよう?ここに、もう一度。

わかってる。

大丈夫。それまでがんばるから。

ねえ、碧。

もう語りかけるのをおかしいともやめたいとも思わない。

もう二度と会えないけど、

空が青いのと同じように

あなたがここにいること

わかるから。

そう思ったら、息ができるわ。

きっと碧もそうでしょう？

そうしてきつとまた出逢う。

同じあおに飛んで。

すべては同じことだった。

すべては同列で、区別も差別もできない。

海と空が同じように。

強くなるは、あなたがいるから。

優しくなるは、あなたが知っているから。

生きているは、あなたと共にあるから。

もう、ひとりじゃない。

ううん。

ずっとずっとひとりではなかった。

空にはあなたの色が広がって。

いつだって思い出させる。

あなたといた幸せを。

あなたがいた幸せを。

あなたがいる幸せを。

あなたとわたしをつなぐたった一つの、青。

青子の物語 完

ブルーストリーズ 完

第十三話：碧（後書き）

ご感想をいただければ、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8505h/>

ブルーストーリーズ

2010年10月10日10時27分発行